

# 長岡京市文化財調査報告書

第 43 冊

2 0 0 2

長岡京市教育委員会

編 集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

# 長岡市文化財調査報告書

第43冊

2002

長岡市教育委員会

編集 財團法人長岡市埋蔵文化財センター

長岡京跡右京第703・711次調査

卷頭図版一



(1) 空から見た乙調寺周辺のようす（南から、平成12年撮影）



(2) 空から見た乙調寺周辺のようす（東から、平成12年撮影）



(1) 乙訓寺表門の礎石と築地壇の基礎（南から）



(2) 東柱筋の礎石と布掘断面（南西から）

## 序 文

平成14年10月1日、本市は市制30周年を迎えます。この記念事業の一つとして、9月に中山修一記念館を開館する予定で、いま整備工事が進められています。

故中山修一先生は市名「長岡京」の名付け親ともい方で、長岡京の歴史解明に一生涯を捧げられました。わずか10年で廃都された長岡京は、歴史のペールに包まれた“幻の都”でありました。ところが、昭和30年に行われた会昌門跡の発掘調査を皮切りに、数多くの発掘調査と文献資料研究によって、長岡京は“現の都”として、明らかになりました。また、こうした先生の情熱と行動によって大きな成果をあげられたことで、多くの人々に希望と感動を与え、ふるさとへの愛着と関心が高まってきています。

記念館は先生のご遺族のご好意により寄付された土地及び建物を利用し、整備を進めています。先生の人となりやその研究成果を通して、長岡京や郷土史にふれるきっかけをつくる施設、情報発信基地として多くの市民の方々に利用していただきたいと考えています。

さて、ここに刊行します報告書は、国庫補助事業として平成13年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

今里三丁目での乙訓寺表門修理に伴う調査では、古代の乙訓寺跡に関する遺構は検出できませんでしたが、元禄年間に建立した門の基礎構造を明らかにできました。今里更ノ町では長岡京二条大路と西二坊坊間西小路とともに大規模な洪水跡を確認しました。『日本紀略』の延暦11(792)年8月の条などにみえる、当時の洪水の様子を明らかにする資料として注目されます。さらに、東神足二丁目では中世の勝龍寺城の土塁が検出され、その構造を明らかにすことができました。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化センターなどの関係機関、また、発掘調査にご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りしまして深く感謝いたします。

平成14年3月

長岡京市教育委員会

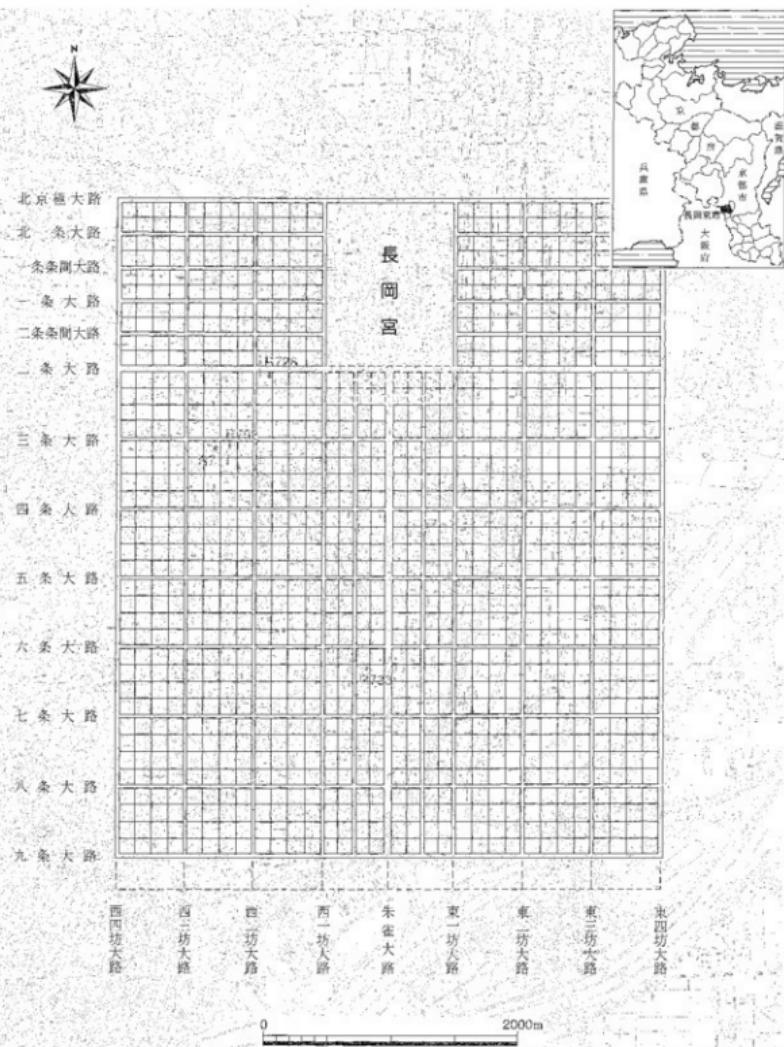
教育長 芦田富男

## 凡 例

1. 本書は、長岡市教育委員会が平成13年度に国庫補助事業として実施した調査概要報告である。調査対象地は付表1のとおりで、その位置は第1図に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、左京城、右京城ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』の旧字名をもとにした地区割りに従った。
3. 長岡京跡の条坊復原は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原案に従った。
4. 本書に使用する地形分類については、とくに断らない限り「長岡市地形分類図」「長岡市史資料編一」（1991年）に従った。
5. 長岡京跡の調査で使用している遺構番号は調査次数+遺構番号であるが、報告により調査次数を省略している場合がある。
6. 本書挿図の土層名で（ ）を付けて示した記号は、『新版標準土色帖』（1997年版）のJIS表記法による土色である。
7. 各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。
8. 本書の編集は、財団法人長岡市埋蔵文化財センターが行った。
9. 現地調査および本書の作成に至るまでの整理・製図作業には、多くの方々のご協力を得た。
10. 遺物写真の一部は西大寺フォト 杉本和樹氏に撮影を依頼した。

付表1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所 在 地	現地調査期間	調査面積	備 考
長岡京跡右京 第703次	7 ANIHR- 6	長岡市 今里三丁目14	2001年6月4日 ～ 2001年7月6日	30m <sup>2</sup>	今里遺跡 乙訓寺
長岡京跡右京 第711次	7 ANINC-12	長岡市 今里三丁目3-6	2001年8月1日 ～ 2001年9月7日	237m <sup>2</sup>	今里遺跡 乙訓寺
長岡京跡右京 第728次	7 ANIFC- 8	長岡市 今里更ノ町19	2001年12月26日 ～ 2002年1月15日	62m <sup>2</sup>	今里遺跡
長岡京跡右京 第733次	7 ANMKI- 8	長岡市 東神足二丁目10-1	2002年2月12日 ～ 2002年2月22日	27m <sup>2</sup>	神足遺跡 神足城跡 勝龍寺城跡



第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)

## 本文目次

第1章 長岡京跡右京第703次調査概要 .....	1
1 はじめに      2 調査経過      3 検出遺構      4 出土遺物	
5まとめ	
第2章 長岡京跡右京第711次調査概要 .....	17
1 はじめに      2 調査経過      3 検出遺構      4 出土遺物	
5まとめ	
第3章 長岡京跡右京第728次調査概要 .....	27
1 はじめに      2 調査概要	
第4章 長岡京跡右京第733次調査概要 .....	29
1 はじめに      2 調査概要	

## 図 版 目 次

- 卷頭図版 1 (1) 空から見た乙訓寺周辺のようす（南から、平成12年撮影）  
                  (2) 空から見た乙訓寺周辺のようす（東から、平成12年撮影）  
 2 (1) 乙訓寺表門の礎石と築地塀の基礎（南から）  
                  (2) 東柱筋の礎石と布掘断面（南西から）

### 長岡京跡右京第703次調査

- 図版 1 (1) 昭和30年代の乙訓寺表門  
                  (2) 表門の礎石と築地塀の基礎（北東から）  
 図版 2 (1) 東本柱の円形礎石（北西から）  
                  (2) 西本柱の円形礎石（北東から）  
                  (3) 東本柱の礎石と墓石（西から）  
                  (4) 西本柱の礎石（東から）  
                  (5) 土坑 S K01断面（東から）  
                  (6) 築地塀基礎の瓦積みと礎石（北西から）  
                  (7) 築地塀基礎の瓦積み（東から）  
 図版 3 (1) 表門の礎石と布掘（北東から）  
                  (2) 東柱筋の礎石と布掘（北から）  
                  (3) 西柱筋の礎石と布掘（北から）  
 図版 4 (1) 西柱筋の布掘断面と下層遺構（東から）  
                  (2) 調査地全景（北東から）  
 図版 5 土器・陶磁器  
 図版 6 軒瓦  
 図版 7 (1) 刻印瓦  
                  (2) 墓輪

### 長岡京跡右京第711次調査

- 図版 8 (1) 調査地全景（北西から）  
                  (2) 調査地全景（南西から）  
                  (3) 調査地全景（北東から）

- 図版 9 (1) 溝S D03・土坑SK09（南西から）  
 (2) 土坑SK01完掘状況（南東から）  
 (3) 土坑SK01最終段階の石組み（北東から）  
 (4) 土坑SK01完掘状況（北東から）  
 (5) 土坑SK01埋没状況（南東から）  
 (6) 壁穴住居SH06（南東から）

- 図版 10 (1) 中近世の出土遺物  
 (2) 磚石・不明品  
 (3) 土製品  
 (4) 石臼・砥石

- 図版 11 (1) 出土土器  
 (2) 砥石  
 (3) 石斧

#### 長岡京跡右京第728次調査

- 図版 12 (1) 1トレンチ全景（北から）  
 (2) 二条大路南側溝SD72801断面（西から）  
 図版 13 (1) 2トレンチ全景（北から）  
 (2) 2トレンチ東壁断面（西から）

#### 長岡京跡右京第733次調査

- 図版 14 (1) 調査地全景（北西から）  
 (2) 調査地より勝龍寺城本丸、天王山を望む（北東から）

## 挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000) ..... iii

### 長岡京跡右京第703次調査

第2図 発掘調査地位置図 (1/5000) .....	1
第3図 乙訓寺境内図 (『都名所図会』) .....	2
第4図 表門の礎石と築地塀の基礎 (1/40) .....	3
第5図 各時期の検出遺構図 (1/40) .....	5
第6図 南壁土層図 (1/40) .....	7
第7図 東柱筋の礎石と布堀土層図 (1/40) .....	8
第8図 西柱筋の礎石と布堀土層図 (1/40) .....	8
第9図 土坑 S K01出土近世遺物実測図 (1/4) .....	10
第10図 整地層・各遺構出土土器実測図 (1/4) .....	10
第11図 溝 S D05出土弥生土器実測図 (1/4) .....	11
第12図 近世瓦実測図-1 (1/4) .....	12
第13図 近世瓦実測図-2 (1/4) .....	13
第14図 奈良～平安時代の軒瓦実測図 (1/4) .....	14
第15図 錢貨・鉄釘・刀子実測図 (1/2) .....	15
第16図 砥石・石臼実測図 (1/4) .....	15

### 長岡京跡右京第711次調査

第17図 発掘調査地位置図 (1/5000) .....	17
第18図 検出遺構図・土層図 (1/200) .....	19
第19図 土坑 S K01実測図 (1/80) .....	20
第20図 土坑 S K09実測図 (1/50) .....	21
第21図 土坑 S K12実測図 (1/50) .....	21
第22図 土坑 S K13実測図 (1/40) .....	21
第23図 竪穴住居 S H06実測図 (1/50) .....	22
第24図 出土遺物実測図-1 (1/4) .....	23
第25図 出土遺物実測図-2 (1/6) .....	24
第26図 出土遺物実測図-3 (1/4) .....	25
第27図 出土遺物実測図-4 (1/4) .....	25

**長岡京跡右京第728調査**

第28図 発掘調査地位置図 (1/5000) .....	27
第29図 検出遺構図 (1/150).....	28

**長岡京跡右京第733次調査**

第30図 発掘調査地位置図 (1/5000) .....	29
第31図 調査前の状況 竹伐採前（上）と伐採後（下） .....	30
第32図 調査風景（南西から） .....	30

**付 表 目 次**

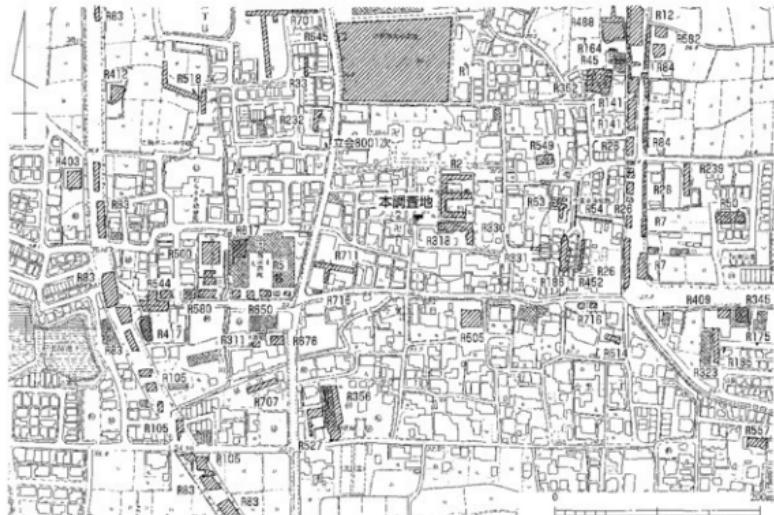
付表1 本書報告調査一覧表.....	ii
付表2 報告書抄録.....	31

# 第1章 長岡京跡右京第703次（7ANIHR-6地区）調査概要

## —長岡京跡右京四条三坊八町、今里遺跡、乙訓寺—

### 1はじめに

- 1 本報告は、2001年6月4日から2001年7月6日まで、長岡京市今里三丁目14において実施した長岡京跡右京四条三坊八町、今里遺跡、乙訓寺跡の発掘調査に関するものである。調査面積は30m<sup>2</sup>である。
- 2 本調査は、長岡京市指定文化財である表門の老朽化に伴う解体修理が行われるのにあわせて、門の地業と白鳳時代に創建された乙訓寺の伽藍構造を明らかにすることを主な目的に実施した。
- 3 調査は、平成13年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センターの原秀樹が担当した。
- 4 調査の実施にあたり、土地所有者の宗教法人乙訓寺、乙訓寺総代、今里自治会、(株)瀧川寺社建築などの方々には種々のご協力とご理解を得た。
- 5 本書の執筆および編集は原が行った。



## 2 調査経過



第3図 乙訓寺境内図（『都名所圖会』）

<sup>(3)</sup>（第3図）に描かれている。同書は、京都周辺の社寺、名所旧跡を解説と挿し絵で紹介したガイドブックとして多くの版を重ねた書物である。これらの絵図によると、表門から入ったばは正面に本堂が向かい合う建物配置になるが、実際は正面に鐘楼があり、本堂はこれより西側に建つ（図版一(i)）。『長岡京市史』建築・美術編によると、鐘楼は旧鐘の銘から元禄9（1696）年に鋳造されている。笠間藩主牧野成貞によって寄進されたもので、細部の様式が本堂などの公儀普請と違う点は異なる工匠による普請と考えられている。絵図と建物の位置関係のくい違いについては、建物の造営経緯が異なる点や現地比定に見誤りがあったものであろうか。

さて、今回の発掘調査は建物の老朽化に伴う解体修理工事にあわせて行った。長年の風雨に加えて、平成5（1993）年の阪神淡路大震災では柱が不規則に動いたことから建物本体が歪む被害を受けていた。発掘調査は、建物および築地塀の解体後、各部材の修理、新調などの作業が行われている間に実施した。なお、解体中に新たに安永9年銘の棟札が発見されている。

表門については、『長岡京市史』建築・美術編に紹介されている。同書によると、表門は一間一戸、四脚門、切妻造、本瓦葺の建物で、木部にベンガラが塗られたことから赤門とも称された。大棟の鬼瓦に元禄8（1695）年の銘があり、棟札の記載と合致することが分かっている。

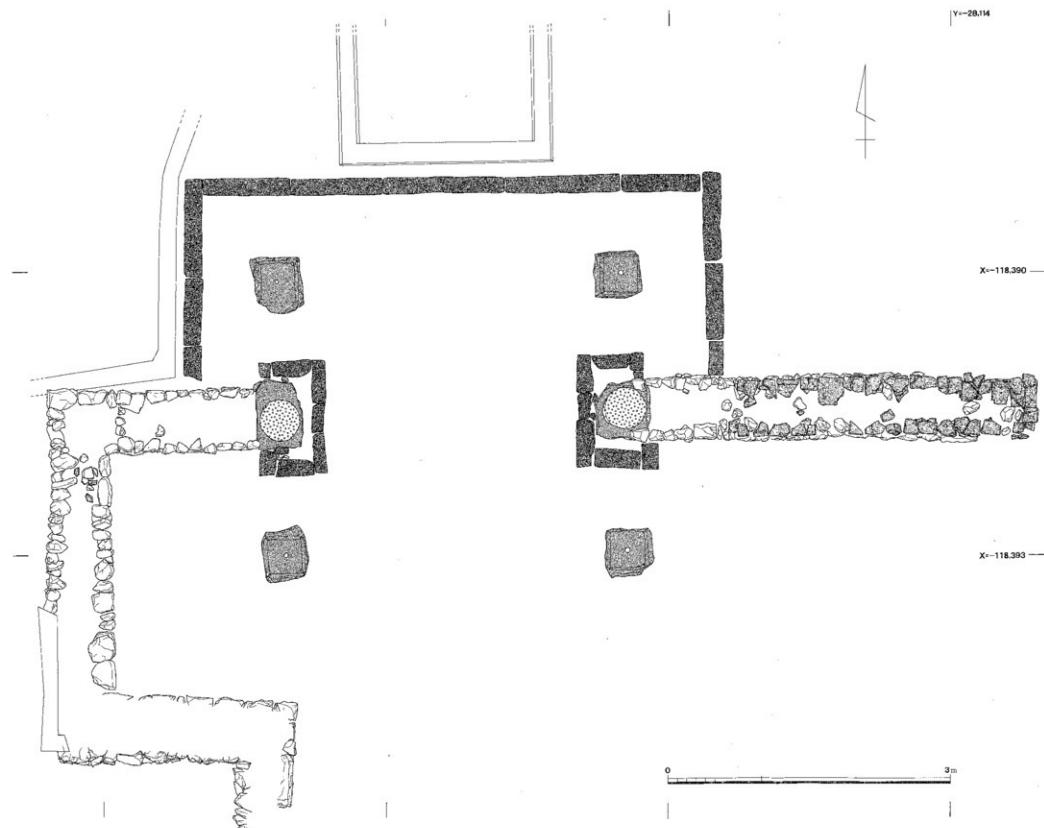
表門は、再利用可能な古材を使って組み立てられ、木部には鮮やかなベンガラを塗布して平成14年春に再建された。

乙訓寺は、小畠川右岸に沿って南北に延びる低位段丘Ⅰ面に位置している。付近の標高は33mである。

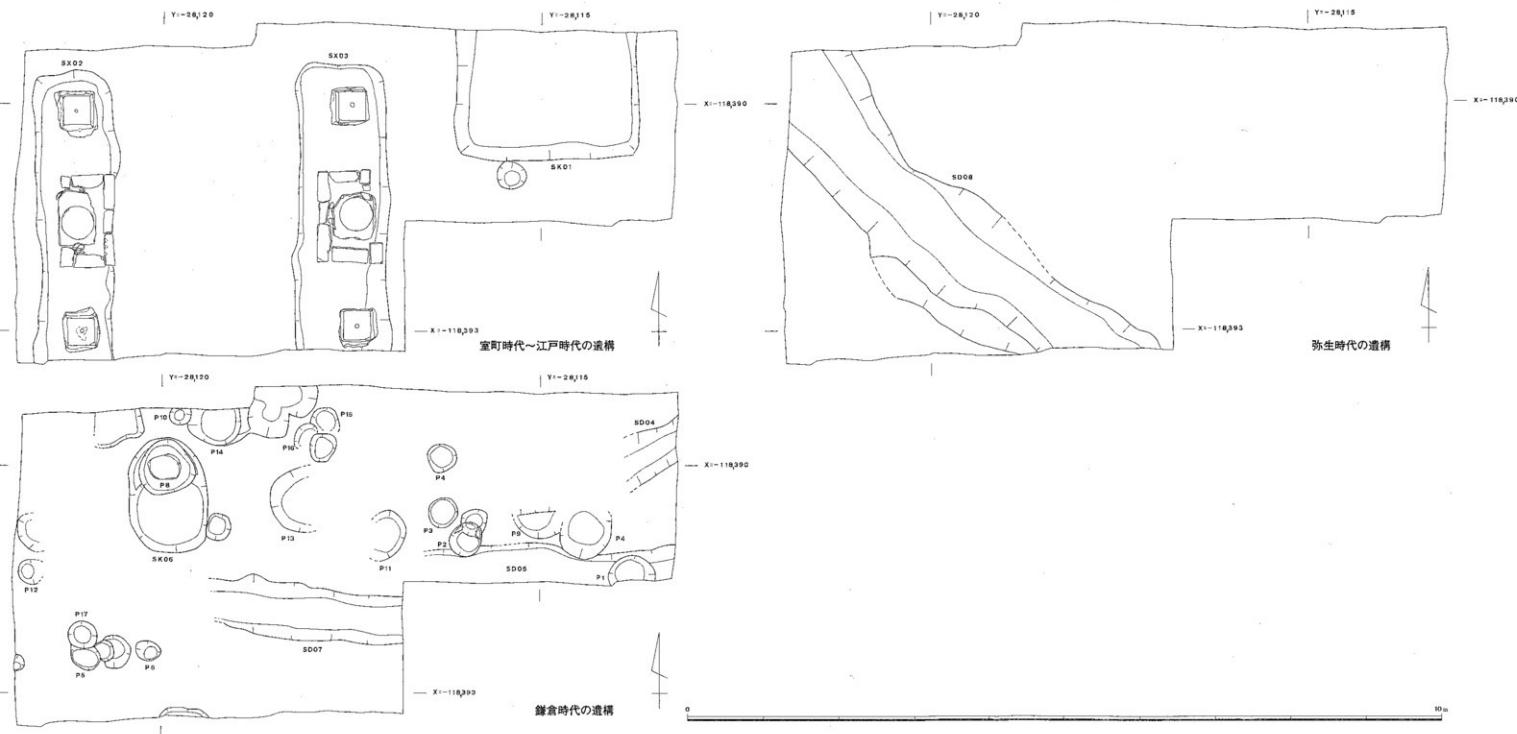
寺域は段丘の平たん面に占地しており、北と南は開析谷がとおる。盛時の寺域は東西三町、南北二町と考えられている。寺の山号は大悲山。真言宗豈山派に属し、合体大師像を本尊とする。洛西觀音畫場第六番目の札所である。

境内の建物は、五代將軍徳川綱吉およびその生母桂昌院の援助によって再興されたもので、元禄7（1694）年に起工し、翌8年に上棟供養を行っている。大師堂、八幡社、表門、裏門は当時から存在する建物である。江戸時代の境内のようすは、元禄7年（1700）の「乙訓寺懇指図」（中井家文書）と、

安永9（1780）年に刊行された『都名所圖会』<sup>(3)</sup>



第4図 表門の礎石と塀地層の基礎 (1/40)



第5図 各時期の検出遺構図 (1/50)

### 3 検出遺構

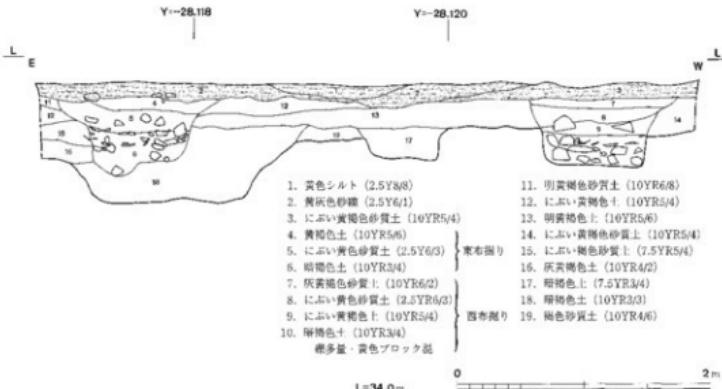
建物と築地塀、通路のコンクリート鋪装を除去した段階から調査を開始した。(第4図、巻頭図版二(1)、図版一(2))。先ず、礎石と築地塀基礎の写真撮影と実測を行った後、門の地下部分と東側築地塀の一画にトレーニングを設定した。以下、築地塀と表門に関する礎石、葛石の現況とトレーニング調査で確認した掘り込み地業について述べた後、各時代の遺構について述べる。

#### [築地塀と表門の地業]

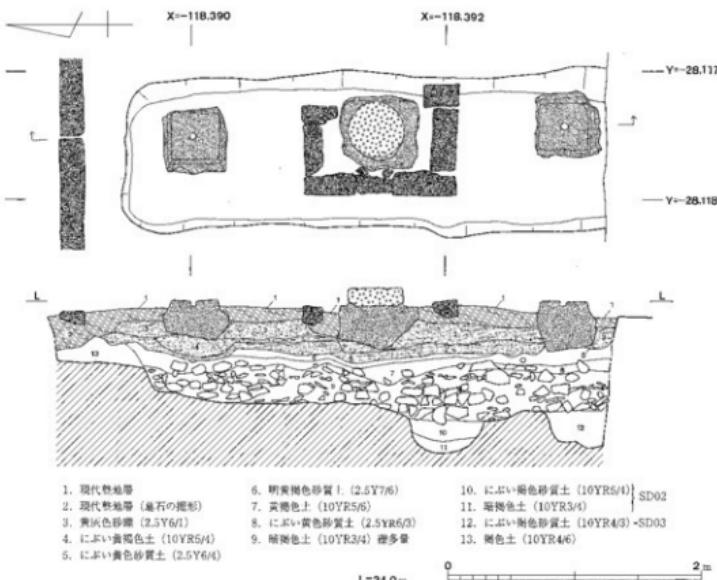
**築地塀の基礎** 表門本柱から両翼に延びる。西側の築地塀はコの字形に巡り、一部コンクリート製擁壁となる。東と西の築地塀は基底部の幅約0.7m、基底部の両側に石の平らな面を外に向けて並べており、東側は石の上に軒棟瓦と平瓦を積んでいる。軒棟瓦には「奥海寺院儀兵衛」、平瓦には「乙訓守」の刻印を押したものがある。

**表門の礎石** 東と西の柱筋に各々3個、中央に円柱の本柱がのる円形礎石。両端の控柱は角柱で、礎石は台座を四角形に造り出す。各控柱の中央には直径5cmの穴を穿ち柱の突起が収まるようになっており、表面にはベンガラが付着する。両本柱の周りは葛石で化粧しており、東西に築地塀が取り付く。石材は花崗岩。築地塀の北側をコの字形に囲う葛石は現代のものである。なお、両本柱の円形礎石を取り除いた下から新たに礎石を確認した。比較的大きな花崗岩を使用しており、中央よりやや内側に直径3cmの穴を穿っている。両礎石の穴は対称関係にあり、控柱を結ぶ線より内側に位置する。石材はかなり風化が進んでいるが、円形礎石を除くと控柱の礎石とほぼ同じ高さに並ぶ。

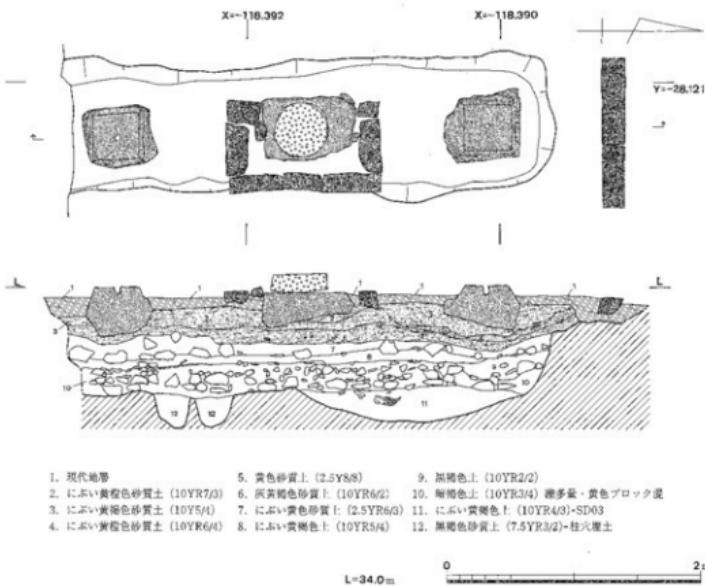
**元禄期の整地土層** トレーニング調査で門の地下部分を掘り下げる。全面に小礫を多く含む黄色系砂質土層が約0.3m堆積しており、各礎石は整地土上に据え置かれた状態である。瓦を中心に多量の遺物が出土した。



第6図 南壁土層図 (1/40)



第7図 東柱筋の礎石と布堀土層図 (1/40)



第8図 西柱筋の礎石と布堀土層図 (1/40)

布掘S X02・布掘S X03 幅1~1.2m、深さ0.4m、長さ3.8m以上。掘形内には地盤を強化するため多量の割栗石が投入されているが、礎石との間には整地土が堆積しており直接礎石を支持していない。平面的には布掘内に礎石が位置しているが、層位的には礎石は布掘全体を被覆する整地土層上に置かれており、両遺構の造作は同時に行われたものでない状況が認められる。割栗石は手のひらにのる小さいものから人頭大程度の大きさまであり、割れて尖るものが多い。遺物は密集する石の間から瓦や土器が多数出土した。

#### [江戸時代の遺構]

土坑S K01 築地塀の北側に掘られた東西2.5m、南北1.7m以上の方形掘形。深さ約0.3m。軒桟瓦や棧瓦を中心には陶器類が出土した。修理時の不要な瓦などをまとめて投棄したものである。

#### [鎌倉時代の遺構]

溝S D04 北東から南西方向の斜行溝。幅0.6m、深さ0.25m。

溝S D05 東側の築地塀と平行する東西方向の溝。北側の肩口のみ検出する。深さ0.1m。

溝S D07 幅0.7m、深さ0.4m。溝S D08付近で一旦終息する。右京第2次調査の溝の東延長線上に位置する。

土坑S K06 1.5m×1mの長円形。深さ約0.5m。柱穴P 8の下層から検出する。

柱穴P 8 直径0.7mの円形。掘形中央に扁平な河原石を据え置く。

その他の遺構 小大のピットを検出したが、小面積のため建物等の復元については難しい。

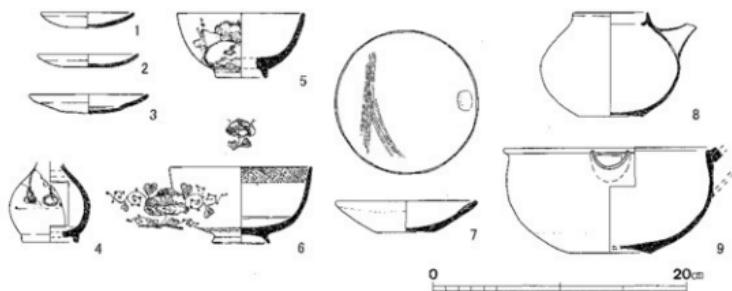
#### [弥生時代の遺構]

溝S D08 北西から南東方向に延びる斜行溝。幅1.3m前後、深さ0.5m。右京第2次調査の弥生時代の溝の方位に類似する。弥生時代中期の土器が出土。

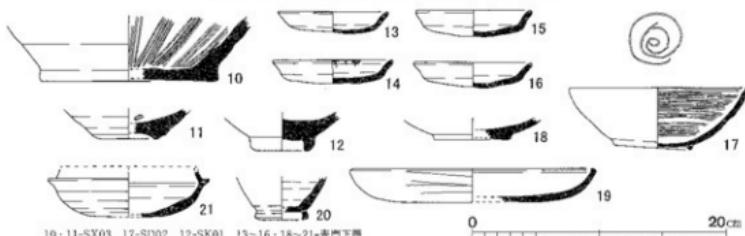
### 4 出土遺物

今回の調査では、弥生土器、土師器、須恵器、縁釉陶器、瓦器、陶磁器、埴輪、瓦、土製品、鉄製品、石製品、銭貨など、整理コンテナ17箱分の遺物が出土した。遺物の大半は、元禄期の整地土層と布掘S X02、布掘S X03から出土しており、他の遺構から出土したものはわずかである。中でも土器や陶磁器に比べて古代の瓦片が圧倒的に多い点は、古代寺院の境内地であることを物語っている。瓦当面が残る軒瓦はわずかしかなく、小片となったものが多い。その数は2400点余りである。

土坑S K01出土近世遺物（第9図） 土師器皿（1~3）、染付の花瓶（4）、碗（5・6）、陶器の灯明皿（7）、急須（8）、行平鍋（9）がある。1は、口径7.4cm、器高1.2。口縁罐部に油煙が付着する。色調は赤褐色系。2は、口径8cm、器高1cm。底部外面に乾燥時の敷物の圧痕が付く。1と2は相対的に器壁が薄い。3は、口径9.4cm、器高1.5cm。見込みに巻線が巡る。2と3の色調は灰白色系。4は、鶴首瓶の花瓶。5は、いわゆる「くらわんか手」。6は、外面に牡丹唐草文、高台脇に蓮弁文の一種と見られる文様を配し、高台には一重線が巡る。内面は、口縁内面に四方擗文を、見込みに牡丹と二重線が巡る。腰の張った丸碗で、器壁は他に比べて薄い。



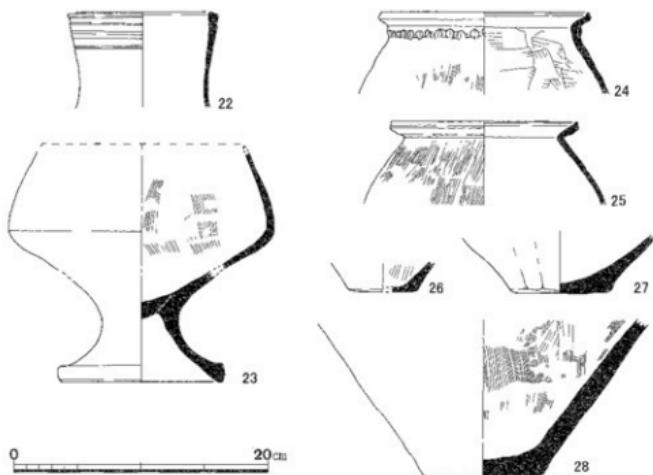
第9図 土坑S K01出土近世遺物実測図(1/4)



第10図 整地層・各遺構出土土器実測図(1/4)

蓋付きと思われる。4～6は肥前産。7は、口径11.2cm、器高2.5cm。口縁端部外面と内面に施釉する。内面は櫛描きの条線を施し、反対側に粒状の粘土を張り付ける。信楽産か。8は、下膨れの体部に小さな注ぎ口が付く。体部には横手に棒状の把手を貼付けた跡が残る。器壁は薄く、外面はロクロ調整で無施釉。内面に白湯色の釉が付着する。9は、一方に突き出た把手と注口、蓋が付く。内外面とも濃緑色を呈する。底部と体部下半は無施釉。これらの遺物は、概ね18世紀後半から19世紀初めごろのものと推定される。

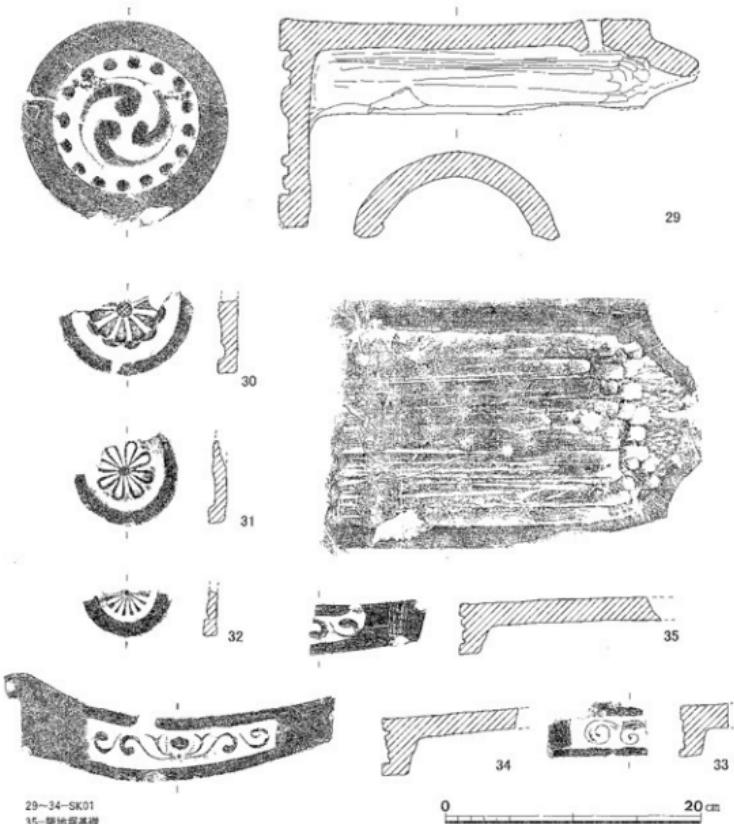
**整地層・各遺構出土土器（第10図）** 土坑S K01から中国製の青磁碗（12）、布掘S X03から信楽焼の擂鉢（10）と唐津焼の碗（11）、溝S D07から瓦器碗（17）と、元禄期の整地層から鎌倉時代の土師器皿（13～16）、平安時代の綠釉陶器皿（18）、長岡京期の土師器皿（19）、須恵器壺M（20）、古墳時代後期の須恵器坏身（21）がある。整地土層と東西の布掘内には各時代の遺物が混入しているが、小片が多く図示できるものは少ない。12は、高台内のみ露胎。釉はオリーブ灰（10Y5/2）を呈し、白く濁った斑が目立つ。10は、1単位5条の摺目を施す。11は、胎土目積み。10・11は17世紀前葉を中心とするものであろう。17は、口径14.2cm、器高4.8cm。暗文は内面と見込みに施す。13～16は、口径8.8cm～9.2cm、器高1.7cm～2.1cm。内外面とも摩滅する。13と14は口縁部に油煙が付着する。13～17は、鎌倉時代から南北朝期に比定される。18は、円盤状を呈する削り出し高台。全面に施釉する。焼成は硬質。9世紀後半に比定される。19は、口径19.4cm、器高2.7cm。口縁部内面に灯芯の燃焼痕跡が多数残る（図版5）。21は、受部の径12.8cm。内面中央は丁寧なナデ調整が施されており、ヘラ磨きのような光沢がある。



第11図 溝S D05出土弥生土器実測図(1/4)

溝S D05出土弥生土器(第11図) 細頸壺の口縁部(22)、台付無頭壺(23)、壺(24~26)、壺底部(27・28)がある。内外面とも摩滅したものが多く、器面調整がわかるものは少ない。22は、直線的に立ち上がる口縁部直下に3条の凹線文を施す。23は、脚台部に深めの体部をもつ。24・25は、「く」の字状に屈曲する口縁部で、端部を上方に肥厚させる。24は、頭部に刻み目を施す。26は、24と同一個体。

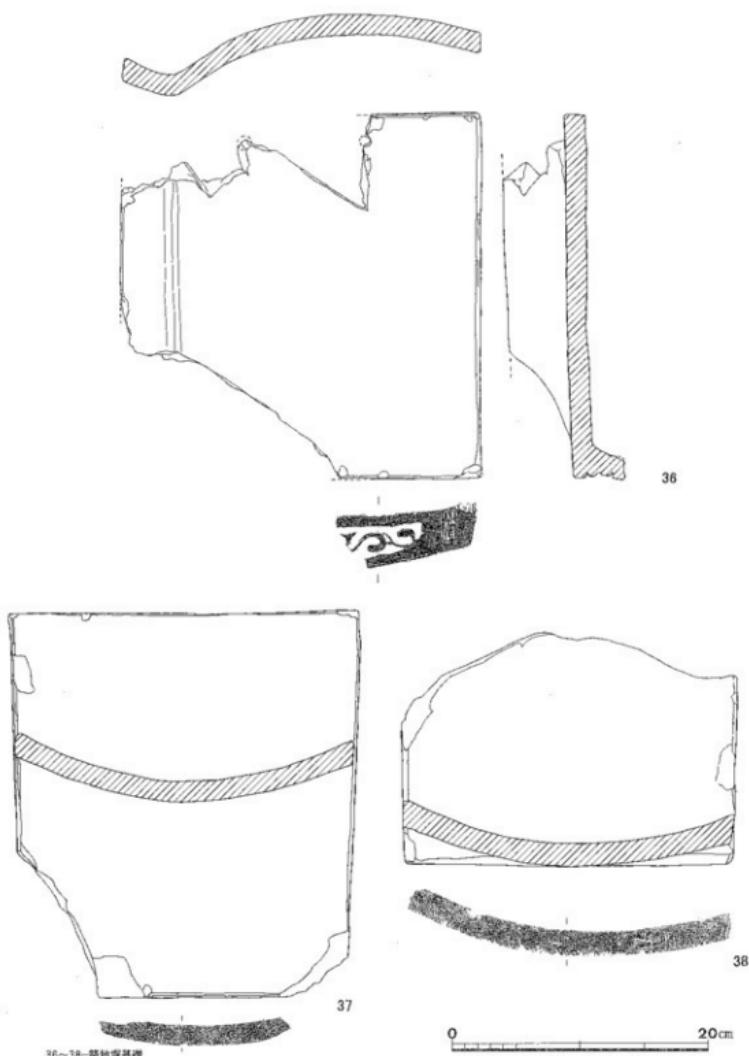
近世瓦(第12図・第13図) 土坑S K01と東側の築地塀基礎から出土した。三ッ巴文軒丸瓦(29)、菊丸文軒丸瓦(30~32)、唐草文軒平瓦(33)、唐草文軒棟瓦(34~36)、平瓦(37・38)がある。29は、左巻きの三ッ巴文の周囲に珠文を配する。直径1.5cmの釘穴が1ヶ所ある。全長33cm、幅16cm。玉縁部の長さ3.6cm。瓦当部の直径16cm。丸瓦部凸面は縦方向のヘラ磨き、丸瓦部凹面は横方向に平行するコビキ痕(コビキB)がある。玉縁部凹面には布目痕があり、丸瓦部凹面は棒状の叩き痕跡が残る。瓦当面には、乾燥時に付いた小さな穴が連なっている。割れ口に沿っている点は偶然か。軒丸瓦で全形のわかるものはこれだけである。30は、花弁をずらせて重ねた菊丸文。花弁は各々10枚。瓦当部の下半が残る。直径9.8cm。31は、花弁を輪郭線で図案化する。花弁の数は8枚。直径8cm。32は、軒丸瓦で最も小型。花弁の数は16枚。直径7cm。33は、逆時計回りの唐草文が2単位連続する。色調は灰白色で、焼されていない。瓦当面と平瓦部凹面には赤色顔料が塗布されている。1点のみ出土する。34は、唯一瓦当面の文様構成と大きさがわかるものである。中心飾りから左右に反転する唐草文の文様区幅は14.7cm。右側2単位目の唐草文の頭部には乾燥時に付いた傷で凹み、中心飾り左側の縦線は范傷である。軒棟瓦については左端に小型の軒丸瓦を伴うものは確認できない。35・36は、瓦当面右脇の平らな周縁部に「奥海寺院儀兵衛」の刻印を押す。文字は長方形の枠で囲われており、大きさは約1.3cm×2.7cm。唐草文



第12図 近世瓦実測図-1 (1/4)

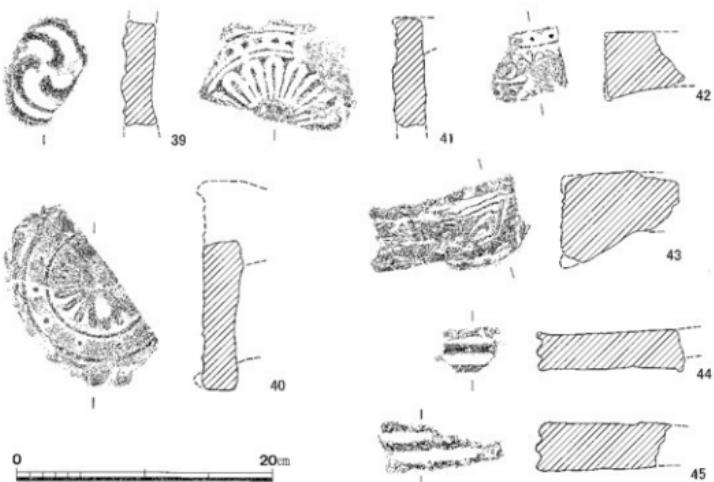
の頭部は乾燥時に付いた傷でわずかに凹む。36は、全長28.8cm、幅28.3cm。棟瓦の後端に2個の釘穴がある。37・38は、平瓦の狭端面に「乙訓寺」の刻印を押す。刻印は約3.3cm×1.3cmの長方形。37は、全長29.8cm、広瀬部幅26.3cm。近世の瓦は、32を除いて黒灰色を呈し、部分的に白みがかったものもある。瓦当面には範型から分離させる雲母粉が付着する。2種類の刻印については、平成元年の右京第330次調査でも出土している。なお、今回出土した棟瓦には通常見られる2ヶ所の切込を持つものはない。

奈良～平安時代の軒瓦（第14図）乙訓寺から出土した古代の軒瓦については、「乙訓寺の瓦」においてI群～IV群の大分類と各型式ごとの分類が行われている。今回出土した瓦は、整地土層と布堀内に多量の石礫とともに投入された遺構の性格上、摩滅した碎片が多く図示できるのが非常に少ない点は惜しまれる。以下、同報告の分類をもとに述べる。軒丸瓦には、三つ巴文軒丸瓦(39)、II群に比定される複弁蓮華文軒丸瓦(40)、I群に比定される単弁十六葉蓮華文軒丸瓦



第13図 近世瓦実測図-2 (1/4)

(41)がある。39は、尾が長い左巻きの三つ巴文。焼成は軟質で、色調は黄橙色系。胎土中の砂粒が少なく精良。外区との境界で剥離している。平安時代後期か。40は、長岡京期の修理瓦。乙訓寺OM-13型式。41は、白鳳期から奈良時代の瓦。焼成は軟質で、色調は灰白色。軒平瓦は、瓦当面がわずかしかなく文様が判然としない軒平瓦(42)、II群に比定される均整唐草文軒平瓦



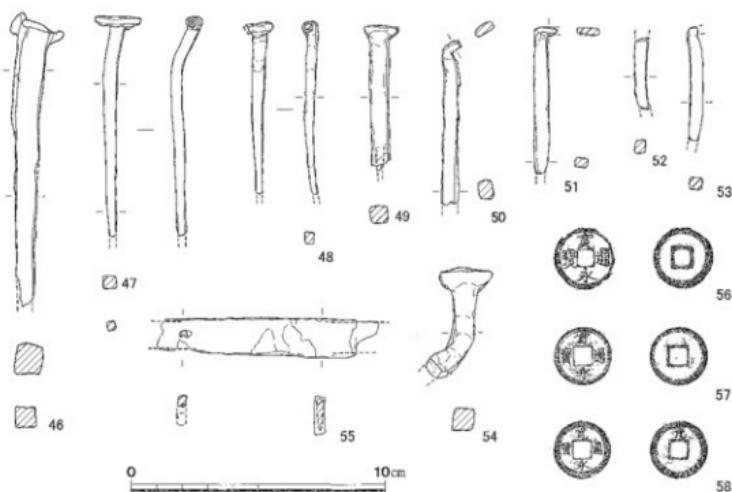
第14図 奈良～平安時代の軒瓦実測図（1/4）

(43)、I群に比定される三重弧文軒平瓦（44・45）がある。42は、瓦当面の残りが悪く型式については確認できていない。胎土は砂粒が少なく精良。平安時代と推定される。44・45は、白鳳期から奈良時代の瓦。乙訓寺O H-2型式。凹面には枠板の圧痕と布目痕がある。44は、硬質焼成で内外面灰色。45は、かなり摩滅する。内外面は赤褐色。

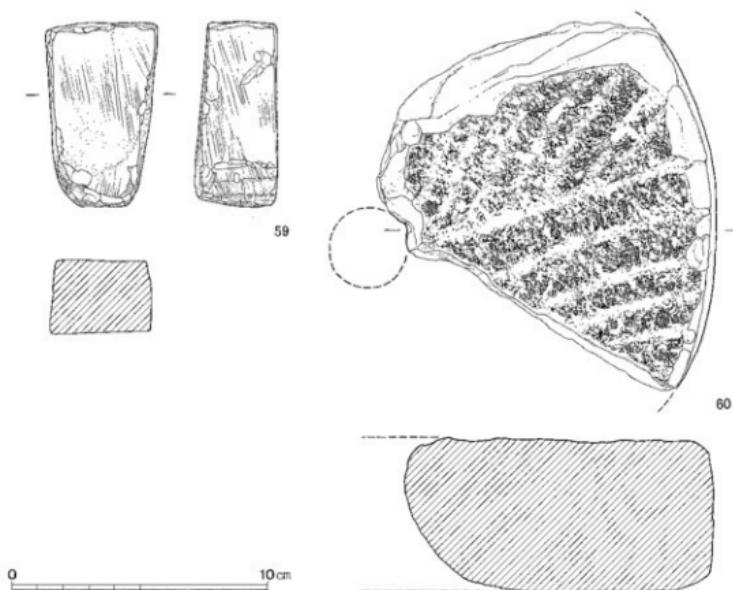
**鉄釘・刀子・錢貨**（第15図） 鉄釘（47～54）は、47の表採品を除くと表門の整地土層などから出土したもので、鏽落とし後に釘と判明した。頭部は、L字形に折り曲げたもの（50・51・53）T字形のもの（46・49・54）、薄く延ばして巻いたもの（47・48）がある。軸は頭部T字形の釘が大きい。刀子（55）には、目釘穴とみられる穴がある。錢貨（56～58）は寛永通寶。58は、裏に「元」字を鏤出する。

**砥石・石臼**（第16図） 砥石（59）は、断面方形の棒状である。上下両面を研磨しており、側面も切断後粗く研磨された面がみられる。石材は砂岩。石臼（60）は、中心に心棒の穴を開いた下臼で、放射状に溝が切られている。石材は花崗岩。

**埴輪**（図版7） 整地土層、布堀などから円筒埴輪の小片が出土した。器表面は摩滅している。61・65は、スカシ孔をもつ。61は、方形か三角形のスカシ孔で、器表面にベンガラを塗る。65は、円形のスカシ孔。62・63は、朝顔形埴輪。62は、口縁部。63は、二重口縁の屈曲部。周辺では、隣接する右京第318次調査から埴輪片とともに石製腕飾類の一つである緑色凝灰岩製の車輪石が出土しており、段丘下には今里車塚古墳がある。今回出土した埴輪片は、同古墳と同じく5世紀前葉を中心とする時期に比定されるが、段丘上にはまだ周知されていない首長墓級の古墳が埋もれているかもしれない。



第15図 錢貨・鉄釘・刀子実測図 (1/2)



第16図 砥石・石臼実測図 (1/2)

## 5 まとめ

今回の調査は、乙訓寺の表門解体後、古材の修復と新調が進められる中、再び建物を組み上げるまでの間に実施した発掘調査である。現存する歴史的な建造物に関わる発掘調査は、平成元<sup>(1)</sup>年（1984）年の長法寺本堂改築工事に伴う発掘調査以来である。

本調査では、当初の目的であった古代乙訓寺の建築遺構については確認することができなかつたが、表門の礎石と布掘の層位的関係の把握を行い、門創建以前の中世遺構と弥生時代の方形周溝墓とみられる溝を確認することができた。先ず表門の礎石に関しては、本柱の円形礎石は柱を根廻する大掛かりな修理が行われた際に置かれたと想定され、その時期は今回発見された棟札と関連づけると安永9（1780）年に求められること。次に、両本柱の創建時の礎石は著しく風化が進み、礎石に穿たれたダボ穴の柱筋も揃わずかつ穴が小さい点は、新調された礎石ではなく前身の建物礎石を再利用した可能性を示すものと考えられる。布掘と礎石に関しては、平面的には布掘内に礎石を配置しているが、実際は元禄期の整地土層に据え置かれており、布掘内の割栗石も直接礎石を支持していない。これは各々の作業が同時に行われたものでなく、元禄期の表門は前身建物の布掘基礎の上に再興された状況を示すものである。布掘の掘削時期は、下層遺構との関係から室町時代と考えられる。同じ位置に南面する門を再興するのは、伽藍配置の上から重要な位置を占めていたことを物語っている。なお、史料によると乙訓寺は永禄年間（1558～70）の兵火で悉く焼失したとされるが、調査で焼土などは見つかっていない。

古代の乙訓寺については、瓦が出土した以外明確に遺構を確認することができなかった。表門の東側でみつかった右京第2次調査の東西方向の溝については、本地点の溝S D07と方向等から同一の溝である可能性が高く、その南隣の右京第318次調査でも幅約3mの東西方向の溝がみつかっている。これらの溝は、中世を通じて主要伽藍の南端を区画したものと考えられる。古代の伽藍配置については、発掘調査された推定講堂跡の東に塔、西に金堂が配置された法起寺式に想定されている。中心伽藍の解明は今後に残された課題であるが、近年寺の西方から乙訓寺の周辺施設と想定される平安時代前期の遺構が見つかっており、寺城に関する新たな調査成果として注目されている。

注1)『長岡市史』建築・美術編 図版30 長岡市史編さん委員会 平成6年

2)『新修京都叢書』第6巻 臨川書店 1994年

3)『九州陶磁』九州近世陶磁学会 2000年

4)原 秀樹『右京第330次調査概要』『長岡市報告書』第24冊 1990年

5)中尾秀正『乙訓寺の瓦』『向日市報告書』第20集 1987年

6)原 秀樹『右京第318次調査概要』『長岡市報告書』第22冊 1989年

7)岩崎 誠『祭ノ神遺跡第2次・長法寺調査概要』『長岡市報告書』第24冊 1990年

8)帝塚山学院大学 中尾芳治氏、京都府教育委員会 福田敏朗氏の御教示を得た。

9)岩崎 誠『右京第701次調査』2001年 本センター調査

## 第2章 長岡京跡右京第711次（7ANINC-12地区）調査概要

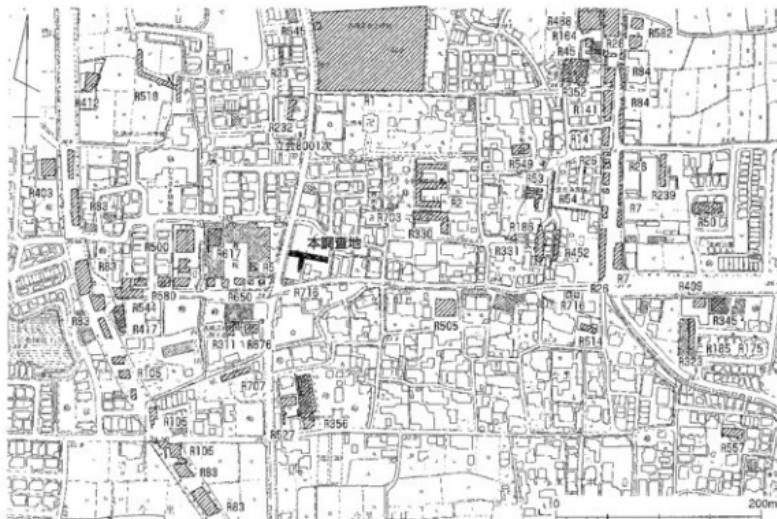
### —長岡京跡右京四条三坊九町、今里遺跡、乙訓寺—

#### 1はじめに

- 1 本報告は、2001年8月1日から2001年9月7日まで、京都府長岡京市今里三丁目3-6において実施した長岡京跡右京第711次調査に関するものである。調査面積は237m<sup>2</sup>であった。
- 2 本調査は、長岡京跡および乙訓寺、今里遺跡に関する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。
- 3 発掘調査は、平成13年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センターの中島皆夫が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、周辺地域の方々に種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は中島が行った。

#### 2調査経過

調査地は阪急電鉄京都線長岡天神駅の北西約1.2kmに位置している。対象地は工場跡地であり、調査区は跡地の中央部にある。調査地の地形は緩斜状地から低位段丘への変換点に相当するが、周辺地域における調査成果から比較的の安定した地盤上に立地していることが予想された。<sup>(付1)</sup>



第17図 発掘調査位置図 (1/5000)

調査地は長岡京跡の条坊復原案で右京四条三坊九町の南東部にあたり、調査地の東側に西三坊坊間小路が推定できる。また、今里遺跡、乙訓寺の推定範囲にも含まれているが、乙訓寺の寺域に関する資料はこれまでの周辺調査ではほとんど得られていない。

当地周辺は比較的多くの調査が行われている地域である。とくに、工場跡地の南西隅では8月下旬から市道拡幅工事に伴う右京第716次調査<sup>(2)</sup>が行われ、古墳時代の竪穴住居や中世の井戸などが検出されている。周辺では一昨年度までの市道拡幅工事に伴う右京第544・580・650次調査<sup>(3)</sup>をはじめ、右京第5・403・412・417・500・617次調査<sup>(4)</sup>が行われ、縄文時代から江戸時代までの遺構が確認されている。なかでも、奈良時代は多数の掘立柱建物が検出され、「次官」墨書き器が出土するなど注目すべき成果がある。

現地調査は2001年（平成13年）8月1日から重機による盛土、旧表土などの除去を行い、順次人力による掘削を開始した。調査区は当初東西方向の長方形に設定したが、竪穴住居および石組み土坑の全容を明らかにするため、西側と南側への拡張作業を行っている。そして、遺構掘削、図面記録作業の終了と機材撤去の後、9月7日に埋戻しを完了した。なお、第VI座標系による調査区中央の座標値はY=-28,202、X=-118,440にある。

### 3 検出遺構

#### （1）基本層序

調査地には全域に盛土（第18図第1層）が施されており、その厚さは0.1~0.5mを測る。基本的に盛土直下より地山が現れるが、南拡張区では地山の上に淡灰色弱粘質土（第7層）が認められた。調査対象地は工場として利用されていたため、工場建物の基礎やその他の構造物にともなう搅乱が著しい。とくに、調査区中央と西端にはコンクリートを伴う建物基礎が穿たれていた。一方、調査区東半の搅乱坑は溝S D03に切られていることから、近代以降のものと考えられる。

#### （2）検出遺構

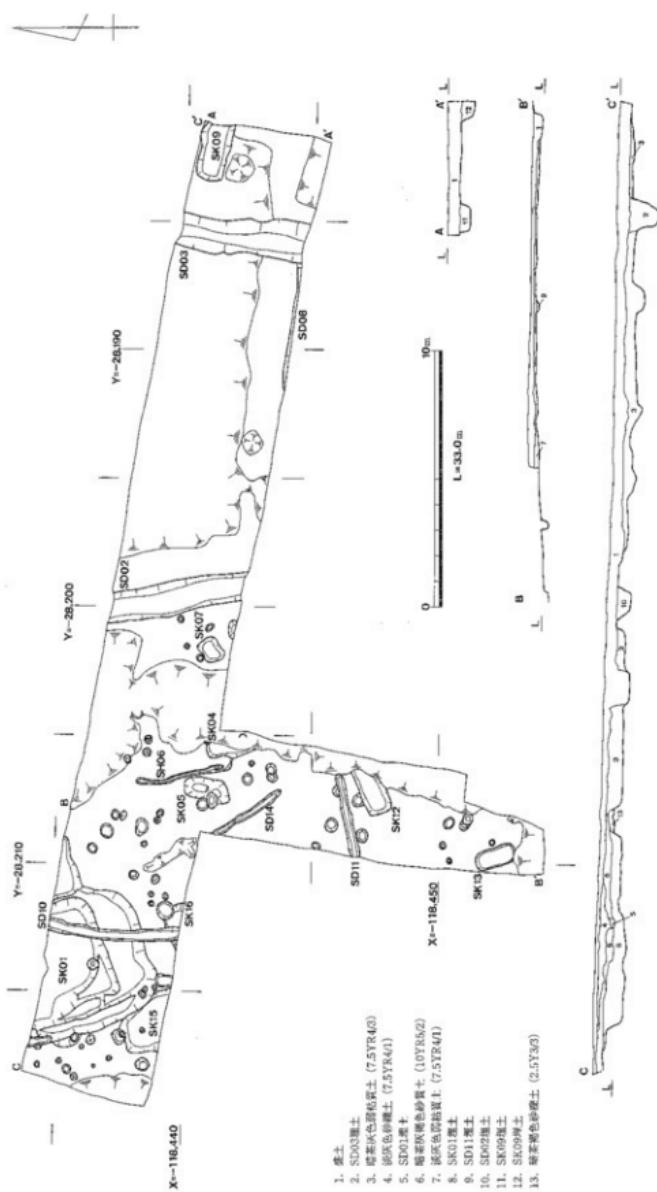
本調査において検出した遺構には溝6条、土坑9基、竪穴住居1棟と、まとまりとして捉えることができない柱穴58基がある（第18図）。近代、近世、中世、古墳時代の遺構があるが、なかでも近世以降のものが多い。

##### 近世以降

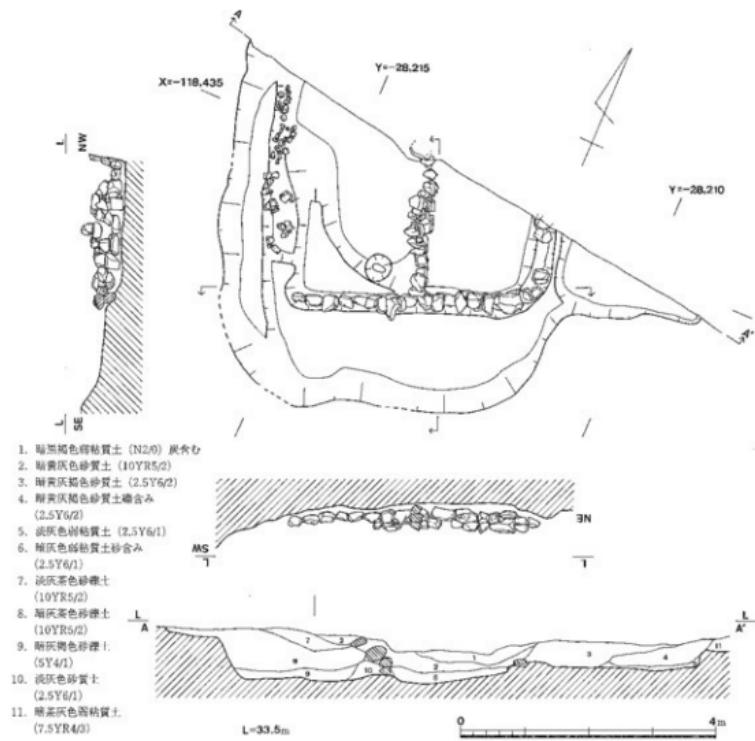
溝S D03 調査区の東端で確認した南北方向の素掘り溝で、幅1.3~1.6m、深さ約1.2mを測る。溝の断面形状はV字形であり、溝斜面は幅0.4m程度の底部から急角度で立ち上がっている。溝は真北に対して約10°東へ振っており、後述する溝S D08と直交している。埋土の最下層には砂やシルトが堆積していたが、それより上は礫、粘質土によって埋め立てられていた。埋土には近代以降の陶磁器、瓦、長岡京期の須恵器が含まれていた。

溝S D08 溝S D03と接続する東西方の素掘り溝であるが、溝の北肩しか確認されておらず規模は分からない。出土遺物はないが、溝S D03との関係から近代以降のものと考えられる。

溝S D02 調査区のほぼ中央部で確認した南北方向の素掘り溝である。溝の規模は幅1.1~



第18図 検出構造図・土層図 (1/200)



第19図 土坑S K01実測図 (1/80)

1.4m、深さ0.5m前後で、方向は真北に対して約10°西へ振っている。出土遺物は少ないが、近世頃と考えられる土師器、陶磁器、瓦などが認められた。

溝S D11 溝S D11は南拡張区のほぼ中央で検出した東西方向の素掘り溝である。幅0.3m前後、深さ約0.1mの小規模な溝で、埋土には第7層と性質が似た淡茶灰色弱粘質土が堆積していた。出土遺物には近世頃と考えられる土師器がある。

溝S D10 調査区の西半部で確認した素掘り溝で、やや東へ湾曲しながらも南北方向に掘削されていた。幅0.4m前後、深さ0.1~0.3mを測り、埋土下層には炭や焼土が含まれていた。溝S D10からは遺物が出土していないが、後述する土坑S K01と重複しており、より新しい時期の遺構であることが分かる。

**土坑S K01 (第19図)** 土坑S K01は内部に石組みを伴う大規模なもので、調査区を西方へ拡張し主要部分の構造を明らかにできた。しかし、土坑の輪郭や内部の石組みは調査区北壁の外へ続いているため、石組みの用途や土坑の性格は判然としない。土坑は東側に2m以上の張り出しを持

つ複合的な平面形態を呈する。しかし、東側の張り出しあは土坑内部の石組み解体に伴うものであり、本来の平面形態は南北方向に主軸を置き、南北6m以上、東西5m前後の長方形を想定できる。土坑の北寄りは南北3.5m以上、東西4.5mの範囲が一段深く掘削されており、石組みはこの範囲の周縁と中央部に構築されていた。ただし、中央部の石組みは当初から存在したものではなく、西半部を埋め立てた後に施されている。また、周縁西辺に大型の石材が認められないことから、中央部の石組みは西辺のものを移設した可能性が指摘できる。石組みは最大3段、高さにして0.6mまでが遺存しており、その方向は北に対して約20°西へ振っている。石材はチャート、緑色岩の角礫が主体的に使用されているが、石臼や礎石など転用材も認められた。また、石組み内からは磨製石斧2点が出土している。

土坑SK01の底部はほぼ平坦であり、検出面からの深さは0.7~0.9mを測る。土坑の埋土には石組みの解体および埋め立てに伴うもの(第1~5層)、東半の機能時に堆積したもの(第6層)、西半の埋め立てと中央部石組みの構築に伴うもの(第7~10層)に分けられる。埋土からは比較的多くの遺物が出土しており、前述の転用石材や石斧のほか、近世の土師器、陶磁器、軒平瓦、中世の瓦器、長岡京期の須恵器、古墳時代の須恵器が認められた。

**土坑SK15** 土坑SK01の南西部で確認した土坑で、全形を確認できなかったが南北方向に主軸を置くものと考えられる。土坑SK01に先行するが、中世の瓦器、近世の土師器が出土しており、土坑SK01との時期的な隔たりは少ない。

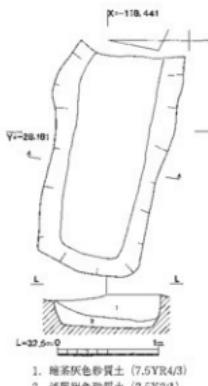
**土坑SK16** 土坑SK01の南で確認した不整形な土坑である。出土遺物には近世頃と考えられる土師器片がある。

**柱穴** この時期の柱穴からは遺物が出土しておらず、灰色系の埋土を持つものを近世以降と考えた。柱穴は西拡張区を中心にして18基を確認している。

#### 中世以前

**土坑SK09** (第20図) 調査区の北東隅で確認した。全形は確認していないが、長軸を西北西に置き、長軸2.2m以上、幅1.2m前後、深さ約0.3mを測る。瓦器碗が少量出土している。

**土坑SK12** (第21図) 南拡張区の中央部で確認した長方形



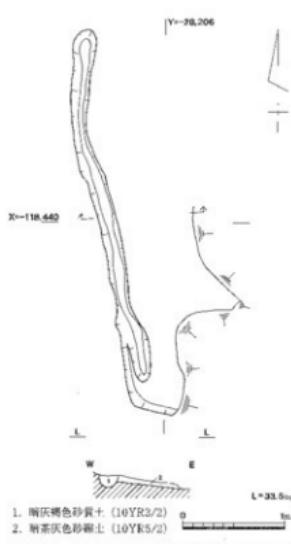
第20図 土坑SK09実測図(1/50)



第21図 土坑SK12実測図(1/50)



第22図 土坑SK13実測図(1/40)



第23図 堪穴住居 S H06実測図 (1/50)

を呈する土坑である。西南西に主軸を置き、長軸2m以上、幅0.9m前後、深さ約0.2mを測る。瓦器椀が少量出土している。

**土坑S K13 (第22図)** 南拡張区の南端で確認した長方形土坑である。北北西に主軸を置き、長軸2m、幅0.9m前後、深さ0.2mを測る。長岡京期の遺物とともに瓦器椀が出土している。長方形を呈する土坑S K09・12・13は土壤墓とも考えられるが、棺の痕跡や遺物の埋納などは認められなかった。

**土坑S K04** 南拡張区の北東隅で確認した土坑であるが、建物基礎による搅乱のために形態や規模が明らかでない。土坑埋土からは土師器、瓦器が出土している。

**土坑S K05** 南拡張区の北端部で確認した不整形な土坑で、南北方向の長さが1.8m、深さ0.4m前後を測る。

土坑の埋土には古墳時代中頃と考えられる土師器が含まれていた。

**土坑S K07** 調査区のほぼ中央部で確認した方形の土坑で、東西方向の長さ約1m、深さ0.4mを測る。土坑埋土からは古墳時代の土師器が出土している。

**堪穴住居 S H06 (第23図)** 堪穴住居は調査区の西部で確認した。建物基礎による搅乱のため西辺の一部しか残っておらず、規模や支柱穴の有無などが明らかでない。堪穴住居の西辺では幅0.15m前後、深さ約0.1mの周壁溝を1条検出した。周壁溝の残存長は約3.5mで、その方向は北に対して約15°西へ振っている。また、この周壁溝によって切られる暗茶灰色砂礫土(第2層)は貼り床と考えられる。堪穴住居の深さは0.1~0.2m程度と浅く、出土遺物も僅かに古墳時代中頃以降と考えられる土師器片が出土ただけであった。

**溝 S D14** 南拡張区の北部で確認した溝で、長さ3.2m以上、幅0.2m前後、深さ約0.1mを測る。溝の形態や埋土の状況から、溝S D14は堪穴住居の周壁溝である可能性が高いが、遺物は全く含まれていなかった。溝の方位は北に対して35°程度西へ振っている。

**柱穴** 中世以前の柱穴は茶色ないし茶褐色系を呈する埋土で、調査区の西半部において40基を確認している。調査区中央部と南拡張区では中世、長岡京期、古墳時代の柱穴を確認している。

#### 4 出土 遺 物

本調査では弥生土器、土師器などの土製品、石斧、砥石などの石製品が整理箱にして6箱出土した。しかし、出土遺物は細片が多く図示できるものが限られていた(第24~27図)。

##### 近世以降

近世以降の土製品には土師器の小皿(1~4)・紅壺(14・15)、陶磁器の碗(8)、軒丸瓦、

軒平瓦（12）、土鉢（13）、伏見人形（16）がある。1～4の土師器小皿は口径6.4～7.4cm、器高1～1.7cmを測るもので、口縁部外面にはナデ調整が施されていない。13の土鉢は大部分を失っているが、鋸状部には横方向の穿孔が認められ、高さ3cm程度に復元できる。14・15の紅壺は口径約2cm、器高2.5cm前後で、底部外面以外をナデ調整によって仕上げている。このうち、15は完全な形で出土した。16の伏見人形は体部の破片であるが、恵比寿形の人形と考えられる。

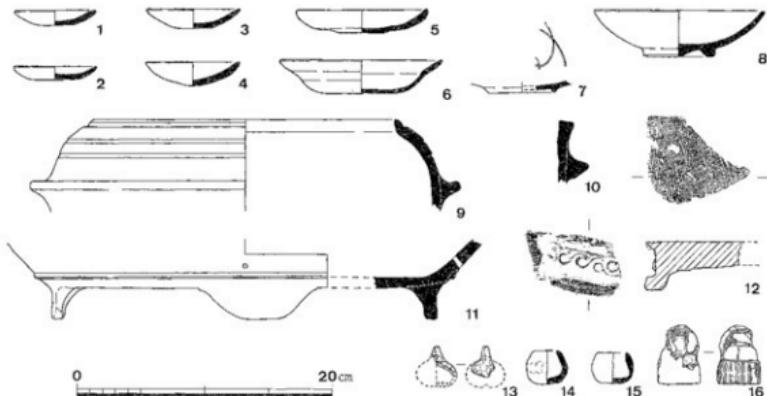
石製品には石臼（17・18）、砥石（19～22）、礎石（24）、不明品（23）が認められた。17・18の石臼は周縁部の破片であるが、17は直径30cm程度に復元できる。砥石には19・20の小型品、22の中型品、21の大型品がある。21は残存長が27.2cmを測るもので、使用面を2面残していた。24の礎石は高さ20cm程度の六面体で、上面と底面は一辺が約28cmの正方形に復元できる。上面中央には柱受けの小さな窪みがあり、底面以外は丁寧に面取りされていた。礎石の形状は右京第703次調査<sup>(4)</sup>で確認された乙訓寺赤門のものと似通っている。23の不明品は厚さ約12cmの六面体であり、礎石や墓石を構成する部材と考えられる。

近世以降の遺物で図示したのは土坑SK01から出土したものが多く、とくに石製品は全て土坑SK01の石組みを構成する部材として転用されていた。

#### 中世以前

中世の土師器小皿（5・6）、瓦器（7・9～11）、長岡京期前後の土師器、須恵器（25～28）、古墳時代の土師器（31～33）、須恵器（29・30）、弥生時代の土器（34）、石斧（35・36）がある。しかし、図示した遺物の多くは土坑SK01など近世以降の遺構に紛れ込んでいたものであった。

中世の遺物には14～16世紀のものが認められる。5・6の土師器小皿は口径10.2、12.8cm、器高2、2.6cmを測る。7は瓦器椀の底部片であり、見込み部分に粗い螺旋状暗文が施されている。9・10は瓦器の羽釜である。9は内傾する口縁部の外面に3条の沈線を施すもので、口径は約24cmで鉢部の外径が34cmを測る。11は瓦器炮烙の底部片で、底部径が32cm程度に復元できる。底部

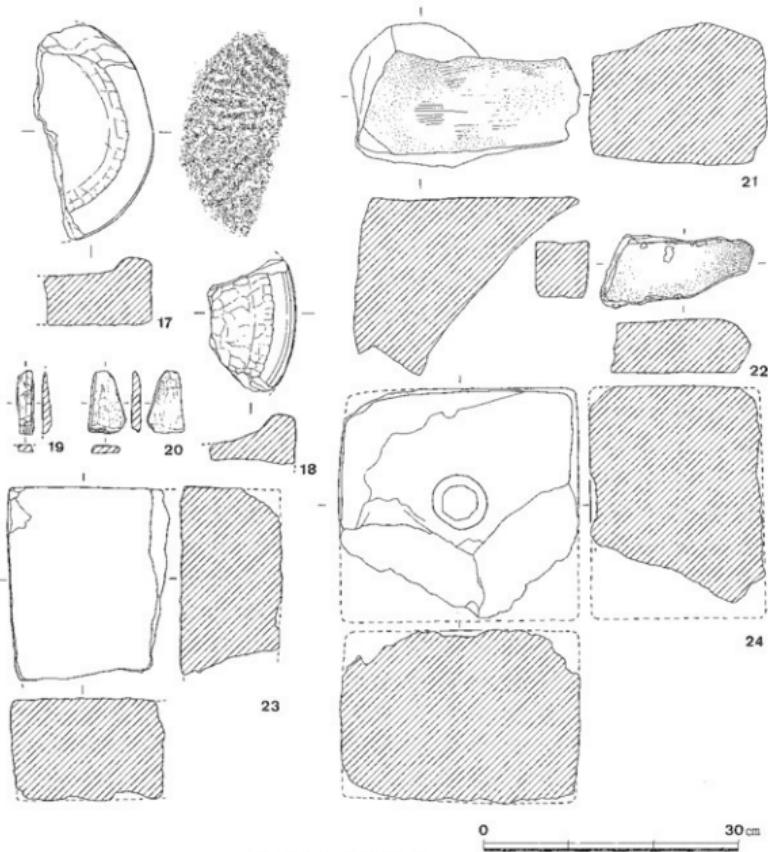


第24図 出土遺物実測図-1 (1/4)

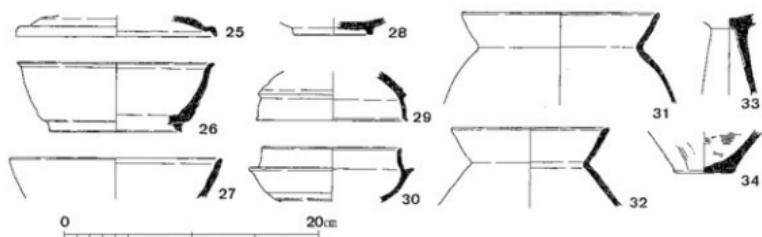
には半円形で板状の脚を有するが、破片であるため脚数は分からず。底部から体部への境界付近に1条の突帯が施され、この突帯の直上には穿孔が認められた。

長岡京期前後と考えられる遺物には、土師器に杯口縁部片(27)、碗、甕、須恵器に杯B蓋(25)、杯B(26・28)、甕がある。26は小さく外反する口縁端部を有しており、全体的な形態とともにやや新しい要素が窺える。口径は15.4cm、高台径が10.4cmで器高は5.4cmを測る。

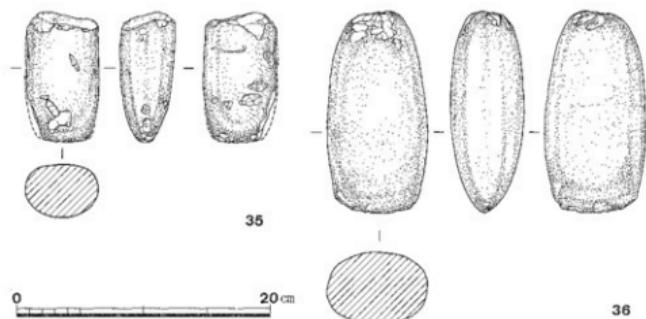
古墳時代では土師器の甕(31・32)と高杯(33)、須恵器の杯蓋(29)、杯身(30)が出土している。31・32は調査区中央部の柱穴から出土した。器壁面の状態が良くないため形態や調整手法を詳細に検討できないが、概ね古墳時代中頃までのものと考えられる。29は口径12cmで高さ4cm前後、30は口径11cmで高さ4cm前後に復元できる。いずれも、形態的な特徴から陶邑窯T K47型<sup>(5)</sup>式に相当し、古墳時代後期前半の時期が想定できる。29は南調査区中央部の柱穴から出土した。



第25図 出土遺物実測図-2 (1/6)



第26図 出土遺物実測図-3 (1/4)



第27図 出土遺物実測図-4 (1/4)

弥生時代のものには弥生土器壺、壺ないし壺の底部片（34）、石斧（35・36）がある。35・36は砂岩製の大型船刃石斧であり、近世以降の土坑S K01から出土した。36はほぼ全形を保つ資料であるが、刃部に使用痕跡があり、後部には後世の剝離も若干認められる。やや扁平な形態を呈しており、長さ15.8cm、刃部の幅6.4cm、厚さ5.9cm、最大幅は中央やや刃部寄りで7.9cmを測る。35は一回り小型のもので後部を欠損している。刃部先端まで10.2cmを残し、刃部の幅4cm程度、最大幅5.7cmで、厚さ4.2cmを測る。

## 5 まとめ

本調査では弥生時代から中世に至る時期の遺物を確認し、古墳時代、中世、近世の遺構を検出することができた。ここでは周辺地域における調査成果を含めて若干の検討を行う。

### (1) 中世以前の状況

本調査では弥生時代の遺構は検出されていないが、磨製石斧が2点出土しており注目される。出土した遺構は石組みを伴う近世の土坑であるが、石組み部材が遠隔地から運搬された可能性は低く、混入品である石斧についても周辺の遺構からの混入と考えられる。今里遺跡では弥生時代の石斧が右京第1次調査など5地点で出土している。<sup>(6)</sup>

古墳時代では堅穴住居1棟と住居壁溝の可能性が高い溝1条を検出した。右京第716次調査で

も古墳時代前半期の竪穴住居1棟が確認されており、緩扁状地の先端部に位置する当地周辺に集落が形成されていたことが分かる。ただし、本調査で確認した竪穴住居は出土遺物が僅かで、詳細な時期を検討できなかった。また、周辺の調査における検出事例も散発的な状況にあり、古墳時代の扁状地および低位段丘の開発時期やその範囲を明らかにするためには、検出事例の増加とともに遺構の時期的再検討作業などが必要と言える。

今回の調査では、期待された乙訓寺、長岡京跡に関連する成果が得られなかつた。とくに乙訓寺の寺域は未だに明らかでなく、周辺地域における積極的な調査や研究の展開が待たれる。

## (2) 近世以降の状況

今回の調査では近世以降の遺構や遺物が他の時代に比べて数多く確認できた。しかし、建物や灰燼処理坑など生活痕跡と評価し得る遺構は確認されておらず、当地が竹藪や空閑地であった状況を類推させる。内部に石組みを備える土坑SK01に関しては、その性格を明らかにすることはできなかつた。浸透性が高い地山の性質や石組み内埋土の状況からは、池など貯水施設としての機能を想定し難い。また、検出面から底部までの深さが0.8m程度しかないことや石組みの簡便な構造から、地下式の室と考えることも困難である。土坑SK01の性格を明らかにするためには、今後民俗的な事例の検討が必要であろう。また、石組みは当初正方形状であったものが西半部を埋め立てて長方形状に変更されている。このような平面形態の変更を機能的に検討することで、遺構の性格がより鮮明になるものと考える。

注1) 日下義義・植村善博「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史」資料編一 1991年

2) 中島皆夫「長岡京跡右京第716次発掘調査報告」「長岡京市センター報告書」第23集 2001年

3) 岩崎 誠「長岡京跡右京第544次・今里遺跡発掘調査報告」「長岡京市センター報告書」第8集 1997年

中島皆夫「長岡京跡右京第580次・今里遺跡発掘調査報告」「長岡京市センター報告書」第12集 1998年

中島皆夫「長岡京跡右京第650次・今里遺跡発掘調査報告」「長岡京市センター報告書」第17集 2000年

岩崎 誠・中島皆夫「長岡京市センター報告書」第19集 2000年

3) 中尾秀正「右京第5次調査概要」「長岡京市報告書」第12号 1984年

木村泰彦「右京第403次調査概報」「長岡京市センター年報」平成4年度 1994年

原 秀樹「右京第412次調査概報」「長岡京市センター年報」平成4年度 1994年

岩崎 誠「右京第417次調査概報」「長岡京市センター年報」平成4年度 1994年

山本輝雄「右京第500次調査概報」「長岡京市センター年報」平成7年度 1997年

岩崎 誠「右京第617次調査概報」「長岡京市センター年報」平成10年度 2000年

4) 原 秀樹「右京第703次調査概要」本書所収

5) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」「平安学園考古学クラブ」1966年

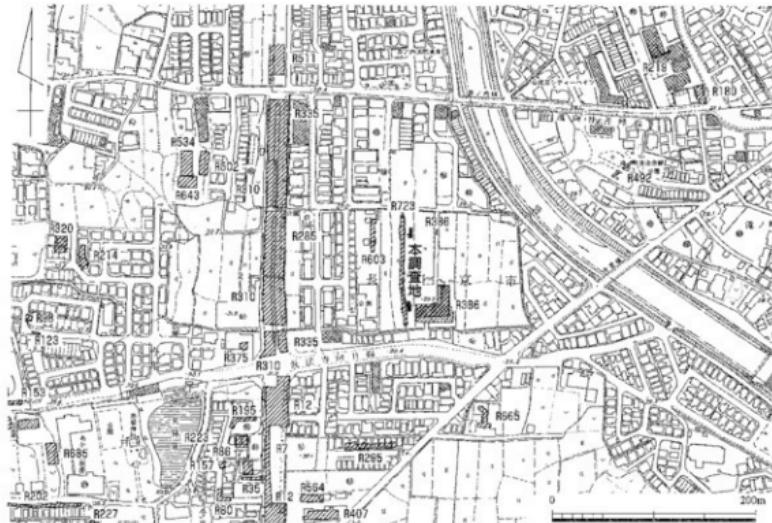
6) 岩崎 誠・福永伸博「四 弥生時代」「長岡京市史」資料編一 1991年

### 第3章 長岡京跡右京第728次（7ANIFC-8地区）調査概要

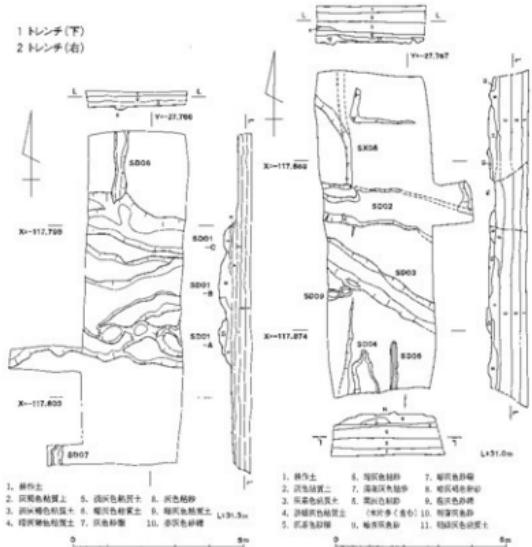
## — 長岡京跡右京三条二坊十六町、今里遺跡 —

1 はじめに

- 1 本報告は、2001年12月26日から2002年1月15日まで、長岡京市今里更ノ町19において実施した、長岡京跡右京三条二坊十六町および今里遺跡に関するものである。調査は南北に二カ所のトレンチを設定した。調査面積は、1トレンチ30m<sup>2</sup>、2トレンチ32m<sup>2</sup>で、合計は62m<sup>2</sup>である。
  - 2 本調査は、調査地東隣りで一部確認されている西二坊坊間西小路と二条大路との交差点および西二坊坊間西小路の路面を横切る宅地内溝の状況に関する資料を得ることを主な目的として実施したものである。
  - 3 調査は平成13年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会から軽長岡市埋蔵文化財センターに委託された調査の一貫として実施し、同センター調査係長 小田桐淳が現地調査を担当した。
  - 4 調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめとする関係者の方々に、様々なご理解とご協力を賜った。
  - 5 正式な遺構番号は、調査次数+2桁の通番であるが、ここでは調査次数を省略した。
  - 6 本報告の執筆及び編集は小田桐がおこなった。



第28図 発掘調査地位置図 (1/5000)



第29図 検出構造図 (1/150)

面に掘られ、南側溝につながる溝 S D06、南北方向の溝 S D07が検出された。S D01は検出幅4.3~4.7mを測るが、掘形と埋土からA~Cの変遷を経て掘り直されていることが判明した。埋土の状況は、いずれも洪水を想起させるような早い水流によって押し流されてきた状況を物語っている。

S D07は西拡張区で検出された浅い溝であるが、埋土から1片だけ須恵器壺Gの破片が出土しているのみで、時期を特定できない。

2 トレンチ 長閏京期の遺物を包含する数層の砂層ないし砂礫層を確認した。この砂礫層は洪水による堆積物と考えられる。これらの層の一つをベースにして東西溝 S D02が、地山層をベースにして斜行する溝 S D03が掘り込まれている。S D02の西端部では両肩に3本づつの杭列が認められた。

トレンチ西端では、南北方向で西から東へ地山層が10cmほど下がる段S X08があり、この段の下に一部SD04が検出された。SD04の心座標はY=-27,768.2であり、右京第386次調査検出の西二坊坊間西小路東側溝（Y=-27,758.7）との距離9.5mとなる。このことから、SD04が西側溝になる可能性は高く、S X08以東が道路として区画されていると考えることができよう。またS X08の上端はY=-27,768.7であり、1トレンチのSD07の西肩の座標（Y=-27,768.9）と近い数値となる。1トレンチと2トレンチとの間が70m離れていることを考慮すると、SD07も西側溝の痕跡である可能性は否定できない。なお、詳細は追って報告する。

## 2 調查概要

調査地は小畑川右岸の氾濫原Ⅰに立地しており、現在の小畑川から100mほど南西にあたる。調査トレチは2カ所設定し、北側の1トレチでは、二条大路南側溝と西二坊間西小路西側溝との合流部の調査、南の2トレチでは、西二坊間西小路と右京第386次調査検出の町内溝との関係を追求する調査として開始した。

1トレンチ 二条大路南側

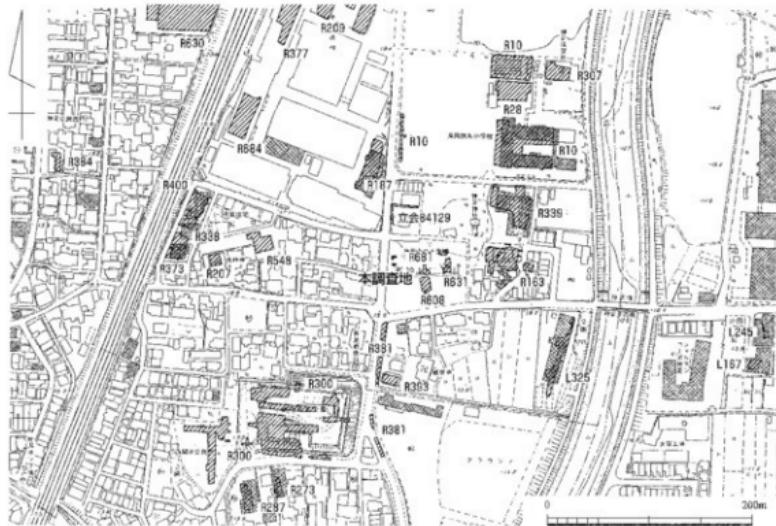
### 溝 S D01と、二条大路の路

## 第4章 長岡京跡右京第733次（7ANMKI-8地区）調査概要

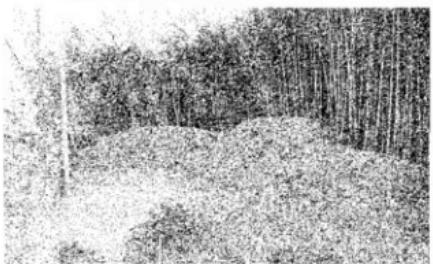
### 一 長岡京跡右京七条一坊七町、神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡 一

#### 1 はじめに

- 1 本報告は、2002年2月12日から2002年2月22日まで、京都府長岡京市東神足二丁目10-1において実施した長岡京跡右京第733次調査に関するものである。調査は2カ所に調査トレンチを設定し、総調査面積は27m<sup>2</sup>である。
- 2 本調査は、長岡京跡、神足遺跡および室町時代の神足城跡、室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡に関係する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。
- 3 発掘調査は、平成13年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター調査員の木村泰彦が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、神足神社、神足自治会、近隣地域の方々に種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は木村が行った。



第30図 発掘調査位置図 (1/5000)



第31図 調査前の状況 竹伐採前（上）と伐採後（下）



第32図 調査風景（南西から）

## 2 調査概要

調査地はJR長岡京駅の南東約400mの竹林の一角に位置しており、北東には延喜式内社とされる神足神社が鎮座する。当地は長岡京跡七条一坊七町のほか弥生時代、古墳時代を中心とする神足遺跡、さらに室町時代の神足城跡、室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡にあたる。このうち室町時代の神足城は、西岡地域を代表する国人である神足氏の居館で、古文書に「こうたにしろ」と記された中心部が当地周辺に推定されている。また細川藤孝により元亀2（1571）年に大改修された勝龍寺城では、この神足城が「神足屋敷」として城下に組み入れられており、現在も土塁・堀が残されている。細川氏の勝龍寺城は縦構を持つ城としては土塁や堀が比較的よく保存されているため、城郭研究上貴重な遺跡として有名である。これまでに勝龍寺城に関しては数回にわたる発掘調査が行われ、多くの成果が得られている。このうち本丸周辺に関しては、都市公園としての整備がなされ、現在は市民の憩いの場として親しまれている。

今回の調査はこの残された土塁に接して、事務所建設が計画されたことによる。建物自体は既存の駐車場部にあたり、土塁等に影響を及ぼすものでは無いと判断されたが、上述した当地の重要性から、平成13年度国庫補助事業として調査を実施することとなった。調査は南北方向に伸びる土塁の東側付近に東西方向のトレーニングを南北に2本設定し、重機によりアスファルト・盛土を除去し、以下は人力によった。調査の結果、南側のトレーニングにおいて土塁の裾に接して掘られた、幅約2.5m、深さ1mの南北方向の溝を検出した。この溝は北側のトレーニングでは検出されていない。これら調査の詳細に関しては、次年度において報告を行なう予定である。

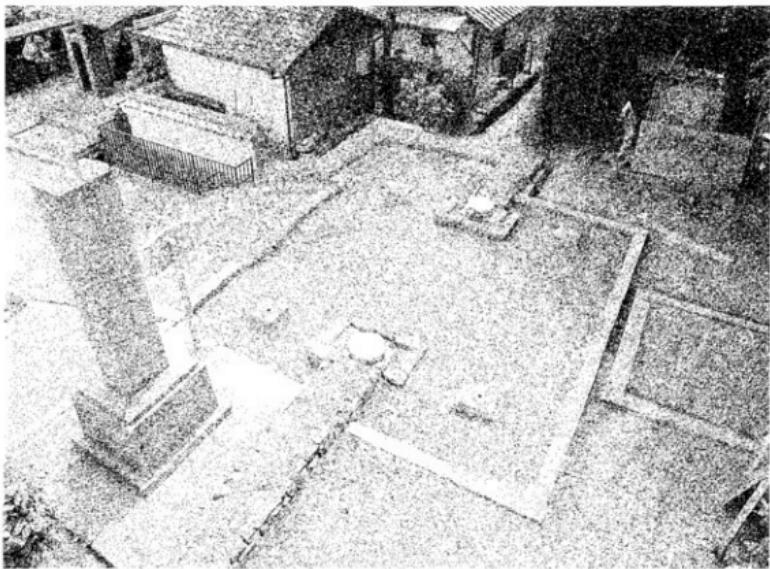
付表2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	長岡京市文化財調査報告書						
副書名							
巻次	第43冊						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小田桐淳・木村泰彦・原秀樹・中島聰夫						
編集機関	財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター						
発行機関	長岡京市教育委員会						
所在地	〒617-0826 京都府長岡京市開田一丁目1番1号						
発行年月日	2002年3月28日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
長岡京跡（右京第703次） 今里遺跡 乙訓寺	長岡京市 今里二丁目14	26209	107 32 28	34度55分 56秒 32秒	135度41分 32秒	20010604 ～ 20010706	30m <sup>2</sup> 遺跡確認
長岡京跡（右京第711次） 今里遺跡 乙訓寺	長岡京市 今里三丁目3-6	26209	107 32 28	34度55分 55秒 29秒	135度41分 46秒	20010801 ～ 20010907	237m <sup>2</sup> 遺跡確認
長岡京跡（右京第728次） 今里遺跡	長岡京市 今里更ノ町19	26209	107 32	34度56分 14秒	135度41分 46秒	20011226 20020115	62m <sup>2</sup> 遺跡確認
長岡京跡（右京第733次） 神足遺跡 神足城跡 勝龍寺城跡	長岡京市 東神足二丁目10-1	26209	107 83 82 84-1	34度55分 00秒 59秒	135度59分 59秒	20020212 ～ 20020222	27m <sup>2</sup> 遺跡確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
長岡京跡（右京第703次） 今里遺跡 乙訓寺	都城 聚落 守院	長岡京期 弥生時代 奈良～平安時代 鎌倉時代 江戸時代	溝 柱穴・溝 表門の礎石・布掘 瓦溜まり・築地塀	弥生土器 縄文陶器・軒瓦 土師器・瓦器 瓦・陶磁器		新たに表門建立期の礎石を確認。刻印瓦。	
長岡京跡（右京第711次） 今里遺跡 乙訓寺	都城 聚落 守院	長岡京期 弥生時代 古墳時代 鎌倉時代 江戸時代	溝 壁穴住居・柱穴 土坑・柱穴 土坑・柱穴	土師器・須恵器 弥生土器 土師器・須恵器 瓦器・陶磁器 土師器・陶磁器 瓦		石組みを伴う土坑	
長岡京跡（右京第728次） 今里遺跡	都城 聚落	長岡京期	二条大路南側溝 西二坊坊間西小路 西側溝 溝	土師器・須恵器・墨書き 土器・瓦		洪水堆積	
長岡京跡（右京第732次） 神足城跡 勝龍寺城跡	都城 城館 城館	城南・桃山時代	溝・土塁	須恵器 土師器・瓦器 土師器		中世勝龍寺城の土塁と 区画溝	

# 図 版



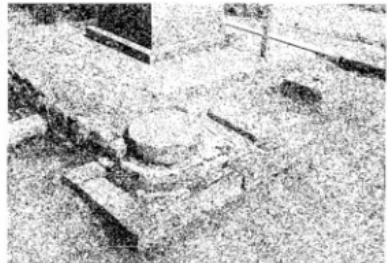
(1) 昭和30年代の乙訓寺表門



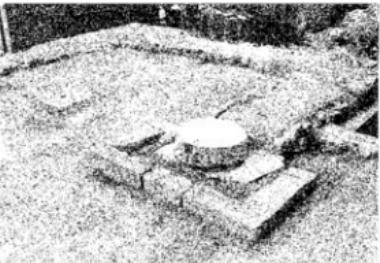
(2) 表門の礎石と築地壠の基礎（北東から）

長岡京跡右京第703次調査

図版二



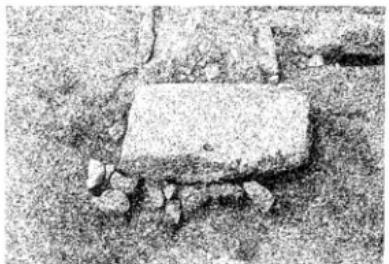
(1) 東本柱の円形礎石（北西から）



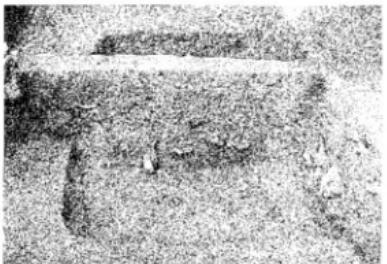
(2) 西本柱の円形礎石（北東から）



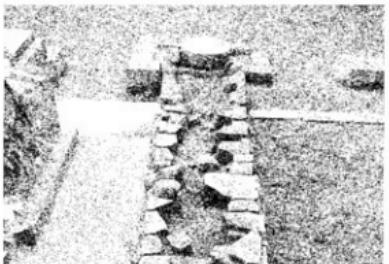
(3) 東本柱の礎石と葛石（西から）



(4) 西本柱の礎石（東から）



(5) 土坑SK 01断面（東から）



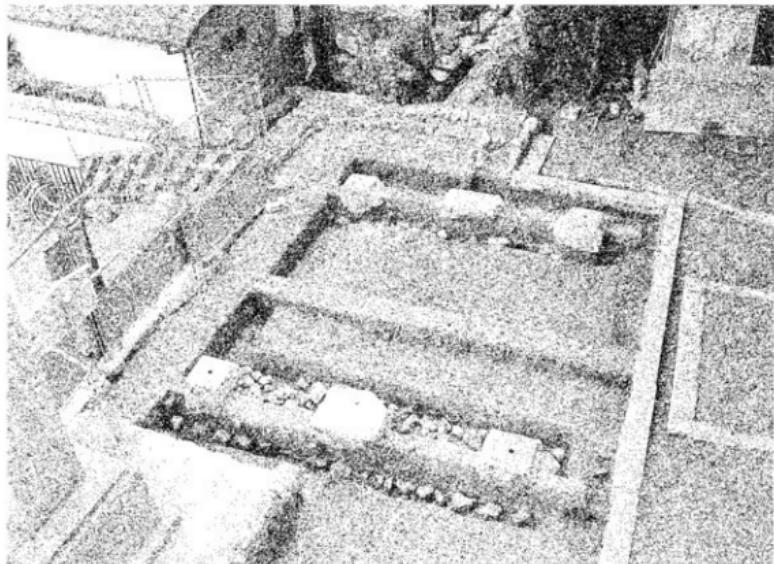
(6) 築地塀基礎の瓦積みと礎石（北西から）



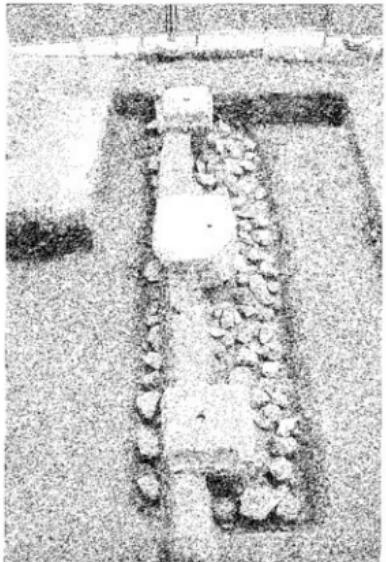
(7) 築地塀基礎の瓦積み（東から）

長岡京跡右京第703次調査

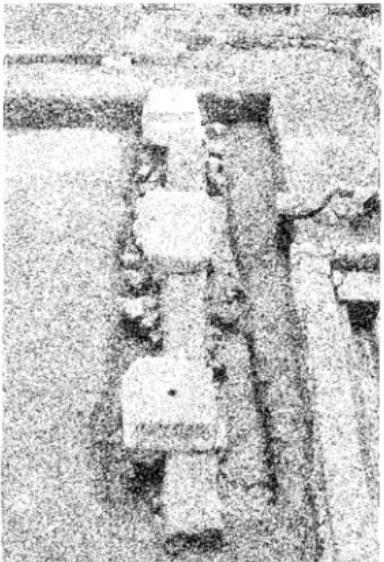
図版三



(1) 表門の礎石と布掘（北東から）



(2) 東柱筋の礎石と布掘（北から）



(3) 西柱筋の礎石と布掘（北から）

長岡京跡右京第703次調査

図版四



(1) 西柱筋の布掘断面と下層遺構（東から）



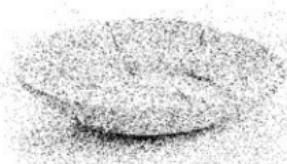
(2) 調査地全景（北東から）

長岡京跡右京第703次調査

図版五



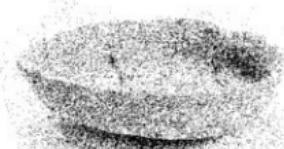
1



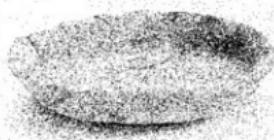
3



13



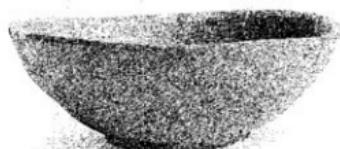
16



14



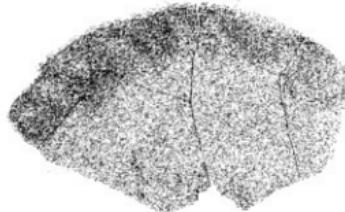
15



17



7



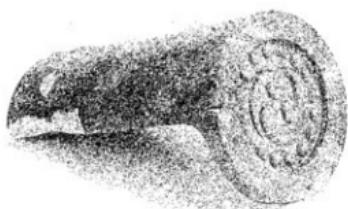
19



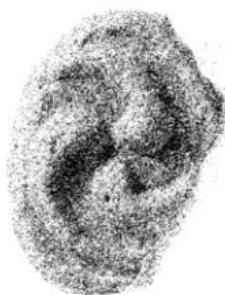
5

長岡京跡右京第703次調査

図版六



29



39



33



40



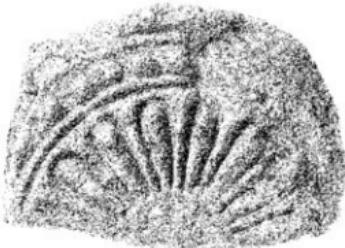
43



44



45



41

軒瓦



38



35



36

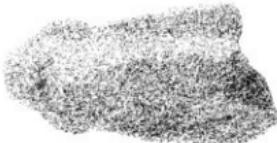
(1) 刻印瓦



61



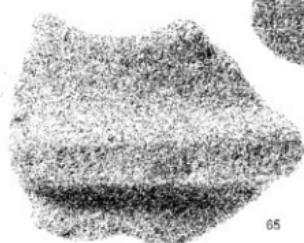
62



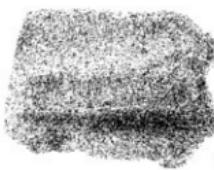
63



64



65



66

(2) 増輪

長岡京跡右京第711次調査

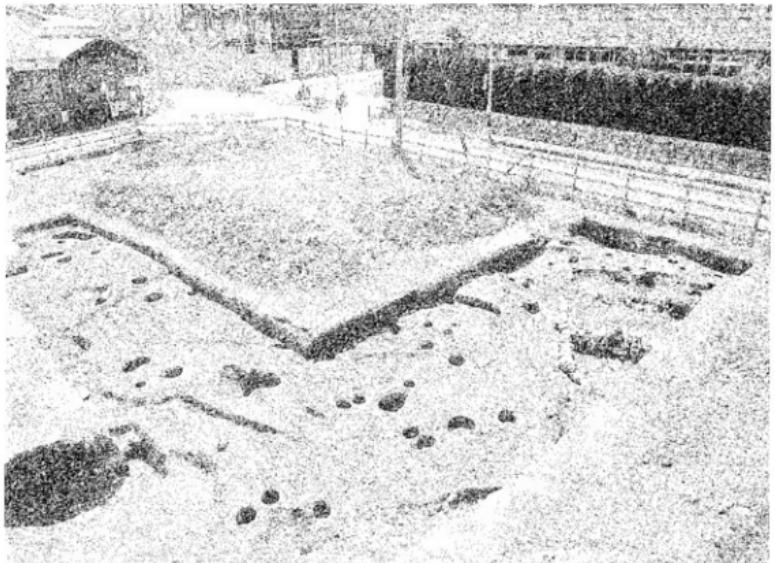
図版八



(1) 調査地全景（北西から）



(2) 調査地全景（南西から）



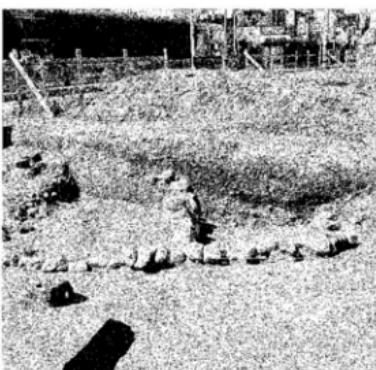
(3) 調査地全景（北東から）

長岡京跡右京第711次調査

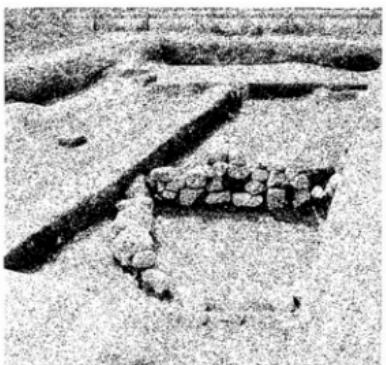
図版九



(1) 溝 SD 03・土坑 SK 09（南西から）



(2) 土坑 SK 01完掘状況（南東から）



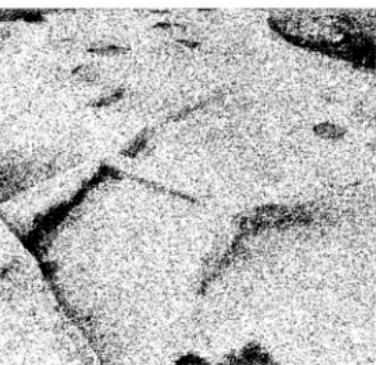
(3) 土坑 SK 01最終段階の石組み（北東から）



(4) 土坑 SK 01完掘状況（北東から）



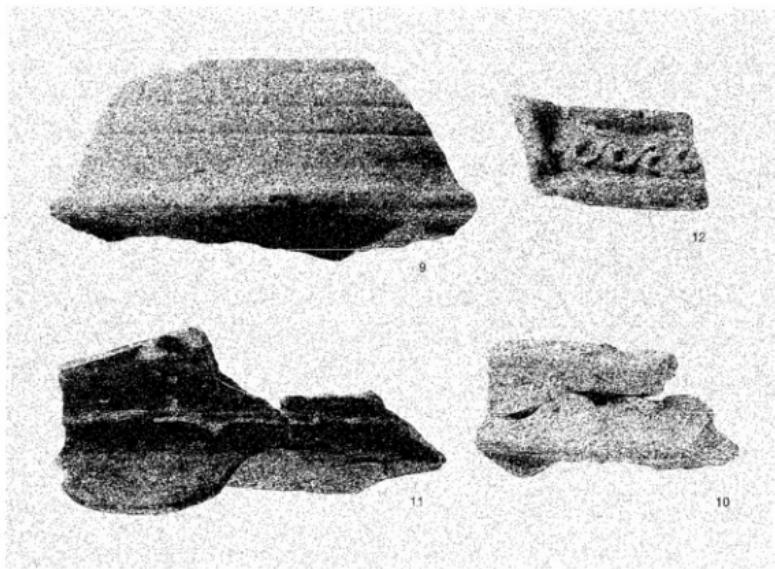
(5) 土坑 SK 01埋没状況（南東から）



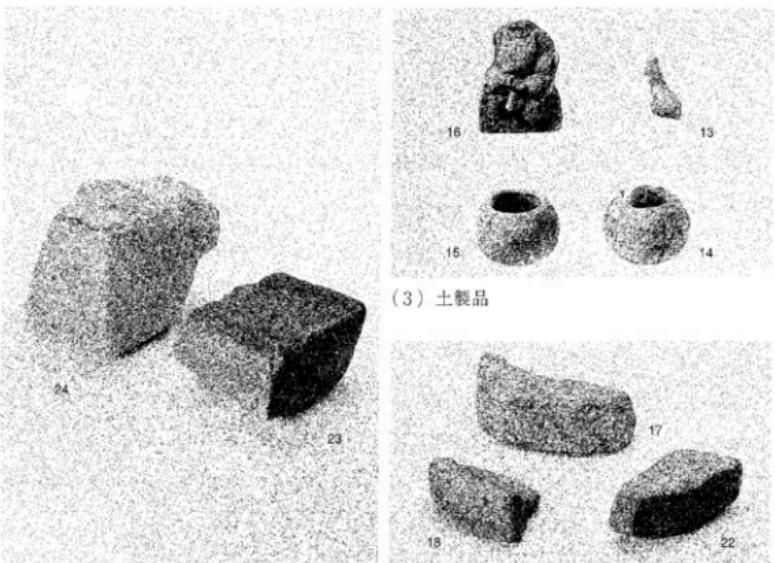
(6) 壁穴住居 SH 06（南東から）

長岡京跡右京第711次調査

図版一〇



(1) 中近世の出土遺物

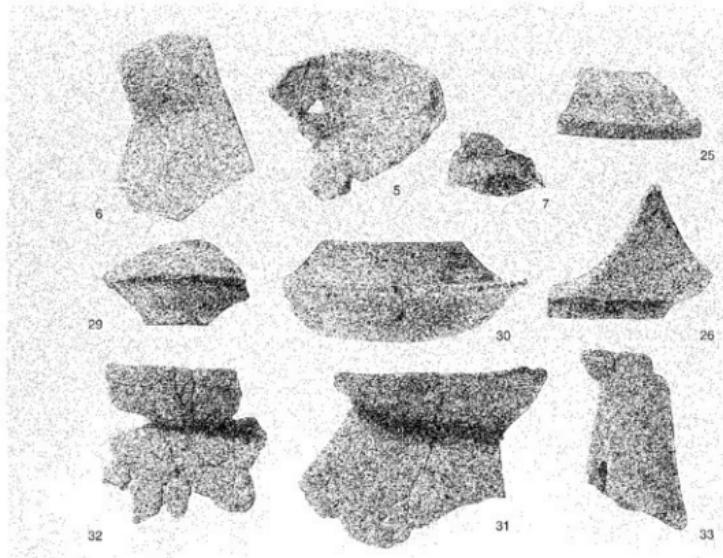


(2) 磯石・不明品

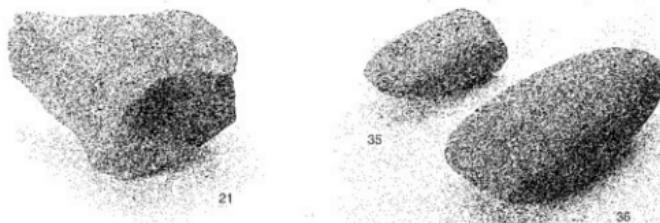
(4) 石臼・砥石

長岡京跡右京第711次調査

図版  
一



(1) 出土土器



(2) 砥石

(3) 石斧

長岡京跡右京第728次調査

図版  
二



(1) 1 トレンチ全景（北から）



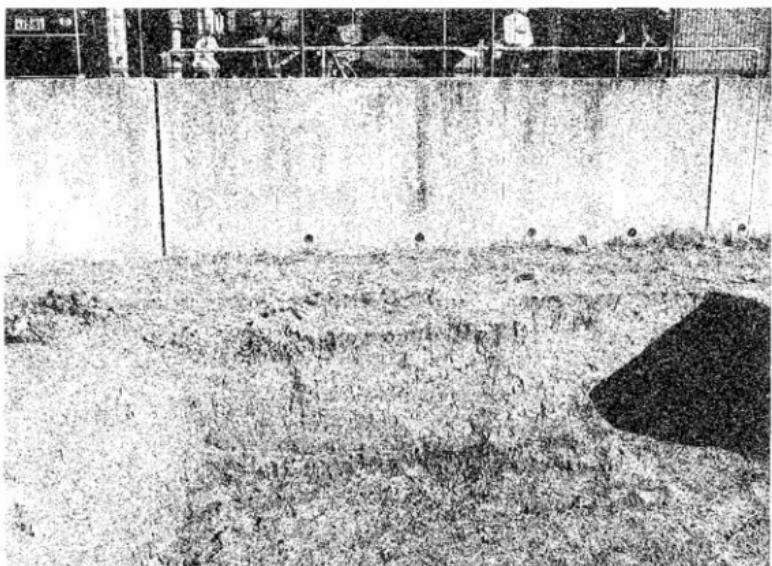
(2) 二条大路南側溝 SD 72801 断面（西から）

長岡京跡右京第728次調査

図版  
一三



(1) 2トレンチ全景（北から）



(2) 2トレンチ東壁断面（西から）

長岡京跡右京第733次調査

図版  
一  
四



(1) 調査地全景（北西から）



(2) 調査地から勝龍寺城本丸、天王山を望む（北東から）

長岡京市文化財調査報告書 第43冊

平成14（2002）年3月25日 印刷

平成14（2002）年3月28日 発行

編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒617-0826 京都府長岡市諏訪田一丁目1番1号

電話 075-951-2121㈹ FAX 075-951-8400

印 刷 株式会社 *よし* 関西支社

〒530-8688 大阪市北区天満2丁目7番17号

電話 06-6352-2271 FAX 06-6355-2860